



筑波大学
University of Tsukuba

Tsukuba Communications

vol.7

2 特別対談①

芸術教育とは

～高い創造的能力を備えた学生を輩出するには～

宮田 亮平氏 × 西川 潔

東京藝術大学長

副学長

8 特別対談②

我が国の医療改革と大学

足立 信也氏 × 五十嵐 徹也

参議院議員・厚生労働大臣政務官、医学博士

理事・附属病院長

14 特集 部局運営②

20 学内組織紹介 計算科学研究センター

22 附属学校紹介 附属坂戸高等学校

24 TSUKUBA SPORTS 体操部

26 TSUKUBA ART & CULTURE ときめき太鼓塾

28 TOPICS 卒業式／交流／表彰／受賞

32 羽ばたくOB&OG 谷本 歩実氏

34 リレーエッセイ

36 茗溪会Letter

37 紫峰会Letter

38 新聞記事掲載一覧

39 イベントカレンダー



特別対談①

芸術教育とは

～高い創造的能力を備えた学生を輩出するには～

宮田 亮平 氏 東京藝術大学長 × 西川 潔 副学長

西川 今回は日本の芸術教育をリードされている、東京藝術大学の宮田亮平学長に「芸術教育」についてお話を伺います。はじめに、宮田先生は佐渡の伝統工芸「蛸型鍔金(ろうがたちゅうきん)」技術保持者のご家庭に生まれたとお聞きしましたが、ご祖父の代から受け継がれているものなのですか？

宮田 佐渡の蛸型鍔金の技術は、18世紀からあるものです。その技術を祖父が学び、父に引き継いだのですが、実は私は何も教わっていないんです。私は七人兄弟の末っ子で、父の仕事を意識し始めたころには、一番上の兄がすでに継いでいましたからね。兄弟はみんな優秀ですが、私は劣等生でした。父や兄から蛸型鍔金について教わることなど考えてもみなかった。むしろ、佐渡にいるころは、父の仕事を否定していたくらいです(笑)。

西川 宮田先生は教育者としての傍ら、鍛金技法たん きんの研究者としても数々の功績を残されています。イルカをモチーフにした「シュプリングエン」シリーズなどの作品で、「日本現代工芸美術展」大賞や「日展」内閣総理大臣賞を受賞するなど、芸術家としてもご活躍ですが、こうして先生が作られた作品と、ご祖父様やお父様の受け継がれた工芸技法との結びつきというのはありますか？

宮田 鍛金ということでは同じ金属を扱いますが、作品としては父たちの作っていたものとは少し違うものですね。私はたまたま芸術分野の人間ばかりの家庭に育ち、自分も芸術をする立場になったので、比較され、辛かったこともありましたが、もし別の環境の中で育っていたら、もっと辛かったのではと思います。例えば、数学者ばかりの家族だったり、医者いしやの家族だったり、そんな中で兄弟と比較された末っ子だったら、逃げ場がなかったと思うんです。芸術というのは、そうした分野ではっきりと出てくる優劣とは違い、簡単に数字では現れない。芸術分野の中で育ったからこそ、私は救われたと思っています。そういう意味で、私の育った環境が芸術分野で良かったと思っています。

西川 芸術教育にはそういう側面があるのですね。



他の芸術大学や他分野の研究機関と積極的に連携を深める

西川 宮田先生は、東京藝大進学後、東京藝大の教員、学部長へと進み、2005年からは学長でおられます。学長就任以降、さまざまな学内改革と同時に、積極的に学外の活動にも取り組まれています。今春からは、大相撲の横綱審議委員会の委員にもなられるとお聞きしましたが、学生時代に相撲の経験があるのですか？

宮田 相撲をやっていた訳じゃないんですよ。格闘技ということでは、学生のころに東京藝大少林寺拳法部を創設したのが私たちだったんです。私は、あまり大きな体つきではないのですが、スポーツが好きでいろいろやりました。横綱審議委員のお話は、スポーツ好きが知れたのか、推挙いただき、せっかくのお話なのでお受けしました。

学外の活動というと、現在、東京、愛知、京都、金沢、沖縄にある国公立の5芸術大学の学長が集まって、法人化や芸術分野の評価、学生支援といったさまざまな問題について意見交換を行っております。今後こうした枠組みとは別に新たな連携を筑波大学とは探っていきたいですね。

西川 筑波大学は芸術の単科大学ではありませんが、問題を共有したいと思いますので、よろしくお願いします。

宮田 2009年12月22日に中国の清華大学美術学院に、私たち5大学の学長たちが行きまして、中国の芸術大学3校と一緒に「日中芸術教育の現状と発展」をテーマに、シンポジウムを開きました。「アジアから発信する芸術の力とは何か」ということを話し合ってきたのです。

100年前までは、音楽も絵画でも西洋の技術をアジアが積極的に取り入れ学んできました。しかし、もうそんな時代じゃない。アジアから世界に向けて芸術文化を発信する。そして、アジアの中でせん えつ僭越ながら日本の芸術教育機関がイニシアチブを持つ。

これは、高揚した気持ちで言うのではなく、一つの責任として感じていることです。高い意識やいい意味でのプライドを持って、日本の芸術家たちが活躍していけば、若い人たちに必ず伝わっていきます。バンクーバー・オリンピックのフィギュアスケートでも、浅田真央選手とキム・ヨナ選手がすばらしい技術のしのぎ合いを見せてくれました。欧州のスポーツ競技で、アジアの選手同士が活躍しているのを見ると、素直に興奮しますよね。小さなセクト争いではなく、もっと大きな視点に立って、教育機関としての芸術大学を連携させていきたいと思っているんです。

西川 筑波大学の芸術専門学群も、海外の大学との交流を積極的に進めています。現在、欧州3校、アジア4校の大学と交流協定を結んでいます。昨年度は、中国美术学院（杭州）と学生作品の交換展を、相互の大学で行いました。芸術の専門教育も、世界的視野で行う必要を痛感しています。

宮田 先ほど話したように、私は芸術教育という環境の中で、救われた部分がありました。筑波大学は、前身が東京教育大学ですので、教育分野に力を入れていると思いますが、私が西川先生と対談させてもらう上で、「芸術教育というものが、成長過程で苦しんでいる若者たちの人間形成に、いかに精神を解放し救いを与えているか」ということを、ぜひ話し合いたいと考えていたんです。

中国の精華大学で話したことも根本は同じで、「科学

や技術の発展だけでは人間社会の文化は、ある一定以上は突き抜けていかないのではないか」「科学や技術の中からもアートは必ず出てくるし、アートの完成がないと、人間社会は突き進んでいくことができないんじゃないか」と思うんです。

多様な選択肢から選べる 新しい教科書作り

西川 全く同感です。ところで科学の話が出ましたが、最近は、理化学研究所とも連携を深めているそうですね。昨年3月に連携協定を結ばれ、11月には「未来を拓く～科学と芸術の交差～」というシンポジウムを開いたとお聞きました。利根川進先生（1987年ノーベル生理学・医学賞受賞）と、野依良治先生（2001年ノーベル化学賞受賞）との3人で鼎談^{ていだん}をされたそうですね。

宮田 お二人は紛れもなく、私よりもはるかに芸術家でした（笑）。利根川先生は、わが校出身の岡本太郎氏を超えるほどの「爆発力」を持っている芸術家、野依先生は、石段を確実に一つ一つ積み上げながら、立派な城郭を築き上げる精密な描写力を持った芸術家。では私はどんなタイプの芸術家なのだろう？などと考えながらお話しさせていただき、気持ちいい時間を過ごさせていただきました。

その時も、やはり私は自分が芸術から受けた恩恵について考えてしまうんです。佐渡から上京するとき、徹底的に比較され、打ちひしがれて劣



にし かわ きよし
西川 潔氏 副学長

1969年 東京教育大学教育学部芸術学科卒業
1971年 " 大学院教育学研究科修士課程修了
1987年 筑波大学芸術学系助教授
1996年 " 芸術学系教授
2002年 " 芸術学系長（～2004年）
2003年 イギリス・ブライトン大学客員教授（～2005年）
2004年 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
2004年 " 芸術専門学群長（～2008年）
2009年 " 副学長

主な受賞歴

1974年 モダンアート協会展新人賞
1979年 SDA賞
1980年 モダンアート協会展奨励賞
1990年 公共の色彩賞
1992年 手づくり郷土賞
2000年 日本図書館協会建築賞
2002年 つくば市制15周年表彰



西川 潔氏 作
筑波大学シンボルゲート 制作年2003年
設置場所 筑波大学中央口
素 材 黒御影石（くろみかげいし）

等感を抱いていたのですが、芸術というのは人に何かを伝える面白さがあって、そこに救われた。劣等感があっても、何かを伝えられるという感触が「あ、僕でもやれるかもしれない!」という勇気を与えてくれる気がしたのです。このような体験から、芸術教育は、子どもたちに勇気や希望を与えるんだという確信に繋がっています。

幼いころには、誰もが歌を歌うのが好きだったり、絵を描くのが好きだったり、力一杯表現することを楽しんでいたのに、いつの間にか嫌になってしまう。好きなものだっただけに、反動で嫌いになってしまう。それはなぜか……。そこには何かがあるのか、ひもといていくと、みんなどこかで比較されたり優劣を付けられて傷ついている。「どうしてそれができないのだ」「こうやって描かないから下手なのだ」と言われたりしてね。

西川 確かに、芸術教育においても、数学や社会科などのように数字で評価され優劣を付けられては困りますね。今、世の中では多様な評価の必要が言われていますが、芸術教育はまさにそれで、子どもたちそれぞれの個性に沿って行われることを期待したいですね。

宮田 おっしゃる通りです。そこが、幼稚園や保育園、小中学校の先生の腕の見せ所なんです。教育現場ではなかなかうまくいかずに、子どもを傷つけているんですね。

私は子どものころ、書道が好きでした。佐渡の冬はとても寒いので、朝は硯の水も凍っていて、それを割って墨をるところから始めるんです。朝食の前に、新聞紙に墨で好きな文字を書く。それが



宮田亮平氏 作
シュブリンゲン「悠」 制作年2009年
第41回『日展』内閣総理大臣賞 受賞
©丸子成明

日課になっていました。手本など見ずに、気持ちよく書いていたんですよ。書き上がった書を母親に見せると「いい字が書けたね」と言って褒めてくれるんです。これがまたうれしくて、やる気にさせてくれた。ところが、小学3～4年生になると、学校の習字の時間では、赤墨で印を付けられ「こうやれ!」「こういう字を書くのだ!」と指導されるようになる。私にしてみれば、それが良い字だとは思えない。理屈抜きで、押し付けるだけ。そのギャップが大きかったんですよ。「こうすれば、字の形として一つの美しさが出るし伝わりやすい。しかし、お前の字にも味があり良さがある。どちらが良いかではなく、こういう形も学んでおきなさい。学んだ後はどちらの良さを選択するか、自分で決めなさい」と、そういう意識のズレを埋めてあげることは、芸術教育ではとても大事なことです。数字や決められた形で採点をする教育ではなく、



みやた りょうへい
宮田 亮平氏 東京藝術大学長

1945年	新潟県生まれ
1970年	東京藝術大学美術学部工芸科卒業
1972年	大学院美術研究科工芸専攻(鍛金)修了
1990年	美術学部助教授
1997年	美術学部教授
2001年	美術学部長
2004年	理事・副学長
2005年	学長

主な受賞歴

1970年	第24回「二紀展」彫刻部奨励賞
1972年	第11回「日本現代工芸美術展」大賞 および 読売新聞社賞、日本TV賞
1979年	第18回「日本現代工芸美術展」文部大臣賞
1981年	第13回「日展」特選
1996年	「国際ジュダイカ・デザイン・コンペティション」銅賞
2005年	第7回「瀬戸山賞」(法務省)
2007年	第46回「日本現代工芸美術展」内閣総理大臣賞
2009年	第41回「日展」内閣総理大臣賞

そういう教育をできるのが芸術教育なのだと、全国に教育者に改めて伝えたいですね。

基礎をきちんと教えることと、一つの形や価値観を「こうやれ」と押し付けることはまったく違う。絶対に間違っただけではないことです。基礎力というのは、「観る目」「心眼」を持つことで、芸術に触れたときに美しいと感じたり、心のときめきを感じるための力です。きちんと身につけさせてあげなくてはいけないけれども、「俺が美しいと感じるから、お前も美しいと思え」と押し付けるなんて、ばかげたことです。価値観はそれぞれあっていいのです。

西川 多様な価値観の存在を教えたり、一人一人の個性を伸ばす教育ができる教員を育成しないといけませんね。

宮田 「芸術教育とはこういう形のことだ」というものを作ってはならないということを、芸術大学の教育現場で教えていかねばと思います。芸術教育で「正解」を決めてしまえば、それが正義になってしまいます。そんな正解を作らず、芸術教育を教えられる人材を育てていくことも、芸術大学の仕事だと考えます。このことを、国公立の5芸術大学だけでなく、筑波大学のように芸術教育に力を入れている大学と連携し、伝えていく仕事をしたいですね。

現在、芸術の教科書は、すごく薄くてできています。美術の教科書なら、有名な画家の絵が何枚か印刷されていて、どこの教科書にも同じような絵が並んでいる。それでは芸術を教えることなんてできませんよ。そこに載っている有名な絵を、とにかく覚えておけばいいって、まさに押しつけです。音楽の教科書でもそうです。もっと幅広く取り上げ、分厚い教科書でいいと思います。その中で、先生が教えたい芸術を教えられるようにする。教師が多様な選択肢、多様な要素の中から、自分の選んだ芸術作品について教えていけるような、先生の勉強にもなる教科書を、他の芸術大学や筑波大学などと連携して作っていくべきではないでしょうか。

西川 それは良い考えですね。教師も選択肢を持てると同時に、生徒たちにも多様な芸術を学ぶ選択肢が増えていくことになりますからね。選択肢の多様化によって、何を学び学ぶかを、先生と生徒がディスカッションし



てもいいですね。

宮田 そういうディスカッションの中から生まれてくる喜びを共有するということは、先生と生徒にとって、とても大事なことです。

西川 私の論文テーマは『医療施設におけるサイン計画の研究』でしたが、病院の中で「人間の尊厳とはどこで保証されるべきなのか?」と問うと、「選べること」の一言に尽きるんです。「夕食の時間を選べる」「食べたいものを選べる」「医者を選べる」患者さんが自分で選べるのが、一人一人の尊厳を守っていくことになるんです。非常に基本的で単純なことなのですが、多様性の中から自ら選択できるということは、人間として、とても重要なことなのです。

「芸術医学」を早急に確立し 日本中に広げていく

宮田 芸術大学でしなければならないことを改めて挙げると、一つは芸術家を育てることです。二つ目は、先ほどお話したような芸術教育を行う人材を育てること。そしてもう一つ。私は、病気などで苦しんでいる人たちを、芸術によって、治したり癒したりする研究をしていくことも、芸術大学の仕事だと考えています。

医学的には、対処療法や予防医療、あるいは西洋医学と東洋医学がありますが、そこに「芸術療法」「芸術医学」というものが加わることで、治すことが可能な医療を確立したいのです。理化学研究所との連携でも、そうした研究を深めていきたいという狙いがあるのです。

西川 現在、国内の大学で、その分野を専門的に研究している大学はありませんね。社会貢献の一環とか、そうした形で芸術が医療現場に関わるケースは見られると思いますが、研究機関として専門的な学問にはなっていません。一方、米国などでは「アートセラピー」として、ドクターまで出している大学があると聞いています。

宮田 国内にも、できるだけ早く専門研究をする大学を作るべきです。東京藝大は単科大学ですので、ぜひ筑波大学にイニシアチブを取っていただきたい。もちろん、東京藝大も協力させていただきます。

西川 研究が進んでいけば一つの体系化となります。そうなったとき、東京藝大と筑波大学が情報を交換・共有しながら、大学教育の現場に生かしていく形になればいいですね。

宮田 西川先生がおっしゃるように、博士まで出すことができれば、将来的には各教育機関で活躍し、新しい人材を育ててくれます。学問として確立すれば、間違いなく筑波大学や東京藝大の外にも広がっていきます。教育は「耕し育む」ことが基本。その効果の広がりにも多少、時間はかかりますが、確実に広げていくために早く立ち上げなければならないわけです。

西川 国立大学には、それぞれ与えられた使命といえますか、実現しなければいけない目標があります。「芸術医学」も含めて、研究成果を教育や医療現場など社会に還元していくということですね。

宮田 特化した芸術環境を整えていく、芸術家を育てていくということも大切なんです、それだけでは芸術

大学としては足りない。一般の人たちの生活の中に、芸術をもっと親しみやすく、距離感の近い文化にしていけることも芸術大学の役割でしょう。それには、大学に來た人だけに教えているだけでは駄目なんです。私は自分のことを「芸術の行商人」と呼んでいて、積極的に外に出て外部との交流を深めることで、それが叶うと思っています。

研究機関として機能する 芸術大学を目指す

宮田 私が積極的に外に出ることで、少しでも学内に刺激があればいいと思っています。「日本社会は経済的に厳しい状態となり、社会全体が危機的な状況にあります。しかし、そんな厳しい社会の中だからこそ、芸術分野の担い手として奮闘して積極的に活動してほしい」と、私は東京藝大の先生方をお願いしています。そのかいあってか、おかげで、研究機関として東京藝大の評価が高まっています。

西川 東京藝大は2年前から、音楽研究科と美術研究科で「リサーチセンター」を設置されていますね。その目的と技能はどういうものですか。

宮田 リサーチセンターは、幅広く活用しようと捉えています。基本的には、博士学位のあり方について研究することを目的に作りました。芸術大学は、やはり専門的な単科を中心に学んでいるので、“美術ばか”“音楽ばか”になりやすい環境にあるんですね。しかし、一つの知識だけを身につけるだけでは、現代社会では通用しなくなっています。作品制作や演奏など、実技と研究論文との位置づけなどを調査しながら、調査研究の一環として実技系博士課程の学生に対する論文執筆のサポートを行っています。具体的な研究活動のための機関ではなく、芸術の実践的な学習と理論的研究を強力に結びつけることで、さまざまな形で社会に優れた人材を送り出すためのサポート環境づくりです。

国内の学生はもちろん、海外からの留学生なども、ここを活用することで博士課程を取得し、母国で活躍してもらう。今日、東京藝大を出て、国内外問わず活躍する人たちが、やがて大学に戻り、さらに研究を深める。そうやって人材が循環していくことを大切にしたいですね。

西川 大学にとって、そこは重要なリソースです。ぜひ参考にさせていただきたいと思います。筑波大学の芸術教育の中でも生かしていきたいと思っています。

本日はどうもありがとうございました。



東京藝大アートプラザ



特別対談②

我が国の医療改革と大学

大学時代には野球部で投手 野球部同期会では多彩な人々との 交流が

五十嵐 本日は、本学の卒業生で教員でもあった、足立信也厚生労働大臣政務官に「我が国の医療改革と大学」をテーマにお話を伺います。早速ですが、足立政務官は、本学の久保一郎教授（人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻）と、野球部でバッテリーを組んでいたそうですね。

足立 はい。久保が捕手で私が投手でした。1～2年生では三塁手とリリーフ投手で、3年生からは外野手でもリリーフ投手でした。

五十嵐 今も野球など、何かスポーツはされているんですか。

足立 それが全然やっていないのです。野球部は年1回、OB対現役選手の試合をやっていますが、私は、議員になった2004年以降はご無沙汰しております。

五十嵐 大学時代の友人とは、今なお交流はあるんですか。

足立 野球のOB戦に参加しなくなったので、その代わりといっはなんですが、そのときの前後4学年くらいの野球部メンバーの集まりを、3年ほど前からやっています。それは医学部だけではなく、芸術や比較文化などの学部の人もあるので、かなりの人数が集まりますね。今では教授になっている人もいて、面白いですね。元我孫子市長の福島浩彦さんや、東洋大学教授で小泉内閣の政策ブレーンで郵政民営化をすすめた松原聡さんも同じ野球部です。厚生労働省の中にも筑波大学出身者が10人くらいいますよ。

医療現場から政界転進のきっかけは、 友人からの出馬要請と地元大分への 思い

五十嵐 医学専門学群を卒業後、本学臨床医学系の教員、外科医になられ、大学近隣の病院に勤務されたの



足立 信也氏 参議院議員・厚生労働大臣政務官、医学博士 × 五十嵐 徹也 理事・附属病院長

ち、政治の道へ転進されましたが、きっかけや動機はどんなことだったのでしょうか

足立 筑波大学との関係は、レジデント(専門医学研修医)として6年、そして1994年7月から2003年3月まで教員として大学に勤務しましたから、足かけ15年になります。政治家を志す最初のきっかけは、2003年11月、私の高校時代の同級生が、衆議院議員になったことです。当時、その2年前の2001年にWHO(世界保健機関)の評価で、日本の医療システムは世界一であると言われていましたが、私自身は「このままでは日本の医療は危ない」ということを現場で自覚していましたから、同級生に、医療問題・政策などを含めた医療全般について、資料や提言を出すから、医療改革を進めてくれないかと話しをしていました。2004年3月の終わりに、突然その友人が私に、大分県の参議院選挙区で、予定していた候補者が出馬を断念したので、(選挙に)出てほしいと言うのです。私の出身の大分県は、全県で1つの選挙区で、そこに候補者が不在ということは絶対に避けなければならないという思いもありました。友人からも、医療

の問題点を正確に指摘して改革していくためには、それを実感している本人が一番適任だろうと、出馬を要請されたのです。それともう一つの理由は、私は37歳で両親を亡くしており、妻も大分県出身ですから、50歳までには大分に帰ろうと決めていたんです。出馬の要請は帰郷の後押しにもなりました。ですから決断は速かったですね。3月末には出馬を決め、大分と東京を行ったり来たりしながら、4月23日に大分に戻りました。全国で最後の出馬表明でした。

五十嵐 そして当選。現在は厚生労働省の大臣政務官を努めておられます。大臣政務官というのは具体的にどのような仕事なのですか。

足立 大臣政務官は、2001年に設けられたポストです。以前は、大臣の下に政治家のトップとして政務次官、事務方のトップは事務次官となっていました。それを政治主導にしようと、政務次官を廃して副大臣と大臣政務官というシステムになりました。英語で言うとparliamentary secretaryで、政治家の大臣秘書みたいなものですね。私の認識では、大臣がやろうとすることを



い が ら し て つ や
五十嵐 徹也 理事・附属病院長

1973年 東京大学医学部医学科卒業
1980年 " 医学部附属病院分院助手
1981年 米国ハーバード大学 (Research Fellow)
1987年 東京大学医学部講師
1988年 茨城県立中央病院医務局医長
1992年 東京大学医学部助教授
2002年 筑波大学臨床医学系教授
2004年 " 大学院人間総合科学研究科教授
2004年 " 附属病院副病院長(～2008年)
2009年 " 理事・附属病院長

実践する役割と、大臣がやろうとすることを作り出す役割もあると思っています。直接実践するということは、ダイレクトに事務方、つまり官僚の皆さんと直接話しをしたり接点を持つわけです。厚生労働省は長妻昭厚生労働大臣の下に副大臣が2人(細川律夫、長浜博行の両氏)います。そして大臣政務官に、山井和則政務官と私がおりますが、この2人で全局を分担しています。大臣がやろうとすることを第一線で実践していきながら、さらに提言や進言もする役割だと認識しています。

五十嵐 山井大臣政務官とは、どういう役割分担ですか。

足立 厚生労働省は11局のほかに社会保険庁があるのですが、私の担当は医療が関係する4つの局と社会保険庁を受け持っています。政務官になり、最初に官僚の方々に言ったのは、「政務官レク」をやめるということでした。新しい大臣や政務官が就任すると、事務方が大臣や副大臣、政務官に教えにくるのですが、これをやめようと言いました。「大臣レク」と言っていた時代には、大臣に説明する担当の官僚と、副大臣、政務官に説明する人が、それぞれ違ったわけです。例えば大臣には局長、副大臣には課長、大臣政務官には係長が説明する形で、いわばバラバラだったわけです。でも今は、報告か相談、指示を受けに来るということで、その場で決めることになり、私のところには局長が課長を伴ってやってきます。そこでまず、その案件の報告を受け協議し、方向性を決めてから大臣に上げます。大臣から「もう一度考え直してほしい」と指示があるときには、私と事務方で再度、対策を考えます。

それと国会審議に関わる仕事があります。本会議や予算委員会、各種委員会などの答弁は、基本的には大臣が行いますが、その答弁の打ち合わせに必ず同席します。ですから国会会期中は、朝7時前に集合して、委員会が始まる9時まで打ち合わせをし、場合によっては昼休みに再度打ち合わせをして、午後の答弁に備えます。委員会が終わると、それから役所の仕事が始まります。その合間を縫って議員会館の自分の事務所に顔を出すこともあります。そんな毎日を過ごしています。

五十嵐 政府の仕事に携わることのやりがいは、医師時代とはまた違うものですね。

足立 野党時代にも政策提言や法案を提出してきましたし、その提言が政府・与党の法案に一部取り上げられ、政策が実現されたこともあります。今はこちらで練った法案をほぼ実行できるわけですから、大変重い責任を感じています。同時にとても大きなやりがいを感じて、日々仕事にまい進しています。

医療費抑制策で医師不足、勤務医の 加重労働などで 日本の医療が危ない!と、診療報酬の 引き上げを実現

五十嵐 初めて議員に立候補するときに、感じておられた日本の医療の問題点というのは、ということだったのでしょうか。

足立 病院、勤務医などに集約されている労働環境の問題は、このまま放置しておくとうる危険性が高くなると思っていました。野党時代からずっと、日本の医療の問題点は大きく二つに集約されていると考えていました。一つは医療費が将来、国の財政を食いつぶしてしまうという危機感から生まれた、医療費抑制策の問題点です。その解決手段の一つとして医療従事者を削減しようという政策ですが、それが医師・看護師不足と勤務医の過重労働を生み、結果として医療の質が揺らいでいるという問題です。そしてもう一つは、医療を提供

する側と受ける側の情報と、その理解の格差。つまり、リテラシーの格差です。現在もこの二つに集約されていると思っています。



五十嵐 医師・看護師不足は、本当に深刻です。

足立 私は以前から「医師が足りない」ということを訴えていました。そして医療費も少な過ぎるということがあります。現状では良質な医療を国民に提供できない。われわれは今回、まず診療報酬の改訂を行って、相当な部分で診療報酬を増やしました。これが以前の医療費抑制策に対する私たちの一つの回答です。

医療リテラシーの格差を埋めるためにどうするべきかについては、来年度、国会での法改正に向け、いろいろ法案を準備しているところです。今回、診療報酬改訂の中でも、レセプトの電子化ができていた医療機関には、患者さんが「要らない」と言わない限り、明細を出すことを義務付けました。現場は大変だと思いますが、患者さんに説明をすることによって理解がかなり高まると思います。中には、「これは前の病院でもやった治療だ」「前の病院でも同じ薬をもらった」など、患者さんから指摘されることになる。それが効率化にもつながります。小さなことですが、これは大きな一歩だと思っています。



あ だ ち し ん や
足立 信也氏 参議院議員・厚生労働大臣政務官、医学博士

1957年 大分県生まれ
1982年 筑波大学医学専門学群卒業
" " 附属病院医員(研修医)
1988年 きぬ医師会病院外科診療科長
1990年 医学博士 (筑波大学)
1994年 筑波大学臨床医学系外科助教授
2003年 " 臨床医学系外科助教授
2003年 国立霞ヶ浦病院消化器科医長
2004年 筑波メディカルセンター病院診療部長
" 参議院議員
2009年 厚生労働大臣政務官

大学附属病院は地域にとっての最後の砦。海外との提携で、医療を日本の成長戦略に

五十嵐 本学としては、地域との関わりも重要と考えております。地域医療に関して大学と地域との関わりはどうあるべきだとお考えですか。

足立 例えば、国立がんセンターをはじめとしたいろいろな医療センターと大学病院はどう違うのか、これは五十嵐先生には言うまでもないことですが、いろいろなセンターは患者をセレクトしているという感覚があります。がんセンターならがんの患者さんだけを対象とする。それに対して大学病院はあらゆる患者さんが集まってきます。1人の患者さんでも併存疾患がある場合も含めて、多種多様な患者さんに対して治療法を確立していく。それが大学病院の役割だと考えています。これからの高齢化社会において、例えば、胃がんの患者さんだけをセンターで集めようとするよりも、トータルに人間というものを考えて、大学で先端医療を追究していくことが極めて大事だと私は思っています。そして地域にとっては、大学病院は最後の砦とりでだと思います。救急医療は得手不得手があるかもしれませんが、それを地域の医療機関とも連携しながら、地域に住んでいる方の健康の最終的な安全の保障となるべきだと思います。

五十嵐 大学も全く患者をセレクトしないということではありませんが、地域の各種の医院・診療所などの医療機関と大学が、きちんと連携していくことが大事なことですね。

足立 例えば、脳血管疾患と心疾患とガンという組み合わせの患者さんの治療などは、センターではできません。これからは、そういう合併症を持っている患者さんが増えてくることは間違いないと思います。そんな患者さんに対して、どのような治療の選択が望ましいのかという答えを出せるのが大学だと思いますし、出す必要があると思います。それと難治性疾患への対応ですね。これは大学にしかできないことだと思います。

五十嵐 そういう意味でも、地域での最後の砦にならなければならないということですね。

足立 そこからさらに進めると、まだ日本の医療システムが世界一という評価があるうちに、国の成長戦略の一つとして、海外との交流を図らなければいけないと思っています。それには先端技術、あるいは先端の検査施設があることが極めて大事なことです。それが大学にはそろっていますし、コミュニケーション言語の問題があるわけですが、大学というのは、海外から来る方に対

して、言葉の問題への対応を最もとりやすいところからです。この利点を生かさないとはいけないと思うのです。これまで医療や介護、福祉というと、いわば税金を使うばかりの“コスト”だということに見られてきましたが、私たちの考えでは、この医療という分野を、わが国の成長戦略の核にしようという認識に立っています。私は、大学を中心に医療クラスターみたいなものができれば、海外からも患者さんが日本での治療を受けに訪れることになると思っています。

五十嵐 まさにそこを本学は目指しているわけですが、大学の医学教育のあり方についてはどうお考えでしょうか。

足立 一般的には2年の卒業臨床研修を、実質1年で修了するような変更がなされていますが、逆に7つの科をスーパーローテーションさせるところでは、(すべての科を体験しているために)マッチング率が極めて高いということがあります。その上位は茨城、愛知、沖縄県ですが、おそらくスーパーローテートが当たり前だという伝統があるからですね。今後の医学教育のあり方で大事なものは、卒前・卒後教育だと思っています。卒前教育、つまり大学教育においては、いかに医学生を医療の現場に立たせられるかということです。それと連動した卒後教育だと思っています。

五十嵐 本学では、卒業臨床研修など、学生を現場に立たせるといった取り組みをずっとやってきていますが、それが卒後研修にも連動させるというのは、具体的にはどういうイメージになるのでしょうか。

足立 かつてのインターン制度が無くなって、その後、卒後臨床研修という形で、筑波大学の場合は6年間一貫教育でやっています。それを他の所では、本来2年の卒後臨床研修を実質1年に短縮しています。これは結局、かつてのインターンと同じようなことになっているということです。現状では、研修医はある意味で病院にとってお客さんみたいなものになっていて、ただ見学に近い形になっているのではないかと思います。だから本来2年の研修を、わずか1年でできてしまうんだろうと。ところが、筑波大学の取り組みはそうではなく、6年間の年度ごとにカリキュラムが決まっています。他がやっているような卒後臨床研修なら、それはもう学生時代にできているんです。私は卒後の臨床研修は、それよりもハイレベルな教育をすればいいと考えています。医師を養成するには、そういう一貫性を持つべきだということです。

五十嵐 2004年ころに、いわゆる「筑波方式」をさらに改善しようということで、実習だとかCBT(コンピューターでの試験、学習システム)を受けるタイミングを

少し前倒しにしました。ですから、卒前教育のいちばん最後のところでは、病院での研修に近い形をとったり、本当に自由に自分の将来設計ができるように、例えば地域に出て行きたければ地域に出て勉強もできるし、基礎研究に行きたければ行けばいいし、ただし最後の何年かは国家試験に合格するようにきちんと勉強せよというようなカリキュラムに変えた経緯もありました。研修の前倒し的なことは、すでに取り組んできています。

足立 大学の教員時代は、レジデントの担当教官を卒後臨床研修でずっとやっていましたので、卒後臨床研修の必修化に向けた取り組みのときには、2年間で最低限マスターすべき項目は、すべて筑波から出したものを採用しました。その後、年齢的には私の後輩になりますが、卒後研修では教授、准教授が出てきて全国で活躍してますよね。

五十嵐 全国でも活躍しておりますし、茨城県の地域医療についても、がんばってくれています。

筑波大学を 「体育と医学の連携」「健康の発信源」に

五十嵐 本学は着々と組織改革を進めており、附属病院にも2年後には新しい病院が完成します。それに並行して産学連携をはじめいろいろなプロジェクトの建物も着工しています。そういう意味でも、筑波はかなり元気な大学だと思っていますが、本学OBとして今後、本学がどのように医療に貢献していけるのか、本学のポテンシャルや今後に期待するものがあれば、ご意見をいただけますか。

足立 筑波大学の特長を考えると、やはり「体育と医学の連携」でしょうか。人間総合科学等をはじめとして、この取り組みは筑波大学にしかできないことであり、そこがステータスだと思います。私には体育関係の後輩もたくさんいますので、筑波大学には「健康の発信源」になってもらいたいと思っています。病気の治療だけでなく、健康対策ということが、筑波大学の置かれているポジションから考えて、取り組むべき課題ではないかと思います。そこに伝統的な物理や化学が加わっていけば、病気のメカニズムの解析や分析でもプラスになるでしょうし、大学全体としてそういった方向に向かうと思っていますし、大いに期待しています。

五十嵐 確かに本学は、他大学に比べて

非常に広い領域をカバーしています。いま病院で取り組んでいるのは、芸術とのコラボレーションです。芸術専門学群の学生や院生が病院に来ていろいろなワークショップをやる。絵を描いたり飾ったりして患者さんとコミュニケーションしながら、どのような反応があるかを見るなどしています。芸術の学生たちも、医療現場はアートを生かせるフィールドだと感じているようで、われわれもすごく楽しみになっています。

足立 オリンピックなどのナショナルチームドクターも、筑波大学関係者は多いですね。国会質問でも、もっと科学的にトレーニングをすればオリンピックで、もっとメダルが取れるようになるんじゃないかと質問が出ていましたが、そういう面でも、筑波大学の力を発揮してもらいたいです。

五十嵐 「健康の発信源に」という本学への期待がありましたが、ご自身の健康についてはいかがですか。

足立 基本的に6時間は睡眠をとるということぐらいです。恥ずかしながら身体は動かしていません。月曜から金曜日は、厚生労働省で仕事をしていますし、今年7月には参議院選挙もあり、週末は大分に帰っていますから、基本的に1日も休みがないんです。

五十嵐 私は還暦になったときに何か健康法を実践しようと思い、ジョギングを始めました。東京マラソンでは、完走することができました。健康と体力づくりのために、早起きをして、皇居の周り約5キロを、ゆっくりと走るといいですよ。

足立 ご忠告ありがとうございます。選挙によって政権交代がなされた日本の歴史の上で画期的なことが行われたばかりで、今がんばらずにいつがんばるんだというつもりですが、自分の健康にも気をつけたいと思います。

五十嵐 “医者の不養生”にならないように、心と身体をリラックスさせる時間をとってください。

本日はお忙しいところありがとうございました。



再開発完成予想図



特集：部局運営②

教育研究の質の向上に向けた部局の取り組み

～部局運営懇談会より～

平成22年度は、第二期中期目標期間の初年度にあたります。国立大学法人として最初の中期目標・計画を終え、新たな目標・計画に基づく運営のサイクルを迎えたことになります。

今後、これまでの実績の上にさらなる成果を実現していくためには、全学としての目標・計画だけでなく、それを踏まえつつ、各部局が大学運営のユニットとして、主体的に目標・計画を立案し、実行していくことが重要です。また、各部局における優れた取り組みを学内で共有することも大切です。このような観点から、各部局と執行部との対話を「部局運営懇談会」として実施することとなり、昨年11月から今年3月にかけて、博士課程研究科を単位として順次開催されました。今号では、前号に引き続き、懇談会の内容から各部局の重点目標やグッドプラクティスを中心にとりあげて紹介します。



国際貢献・社会貢献型修士・博士の育成 ～更なる国際化へ異分野融合型教育研究の推進～

国際性・学際性を重視した専攻体制

本研究科では、平成20年度に改組を行い、独立修士研究科としてあった地域研究研究科を、本研究科の前期課程専攻「国際地域研究専攻」として組織内に組み込むとともに、後期課程専攻として「国際日本研究専攻」という新しい専攻を設置し、国際的・学際的な地域研究・日本研究推進の体制を整備しました。

本研究科は海外からの留学生が多く、現在では在籍する研究科院生の約4割を留学生が占めています。留学生対象の英語プログラムも、世界銀行などからの奨学金で運営される経済・公共政策マネジメントプログラム（経済学専攻・国際公共政策専攻）や平成22年度からのグローバル30プログラムを含む中央アジア関係のプログラム（国際地域研究専攻）などがあり、これからもさらに、発展・充実させていこうとしています。

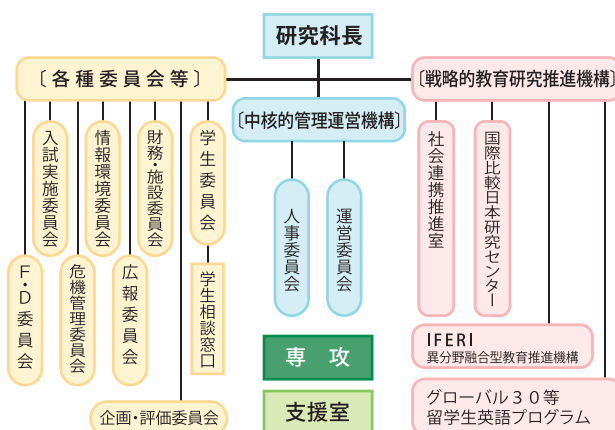
異分野融合型教育研究推進機構の設置

本研究科では、国際化の推進とともに、学際的・異分野融合的な教育研究の開拓を目指しています。この方面の本研究科の試みは、平成19～20年度に大学院教育改革GPIに採択され、「インターファカルティ教育研究推進機構（IFERI）」という機構を設け、個々の院生の問題意識・研究テーマに応じて、専門の異なる複数の教員が、分野・領域を越えて指導に当たる、教育研究システムを構築してきました。今後も、IFERIによる異分野融合型教育を推進し、従来にはない豊かな教養と専門知識を持ち、国際社会に貢献できる人材の養成を、目指して行きたいと思ひます。

円滑な研究科運営体制の整備

研究科の教育研究戦略を実現するために、下図のような、柔軟に課題に対応できる戦略的教育研究推進機構と、研究科内にきめ細かく目の行き届く各種委員会の活動によって、円滑な研究科運営を実現していきます。

人文社会科学研究科運営組織図



人文系及び文化系の総合的な発展を目指す ー人文・文化学群ー

共通した学問領域を含みながら、教育目標の異なる3学類（基礎的な人文学類、学際的な比較文化学類、応用的な日本語・日本文化学類）により、構成されています。

初年次生の専攻選択支援の取り組み

人文学類では、専門の演習科目を1年次生に公開したり、1～2年次生対象に専攻説明会を開催するなどの工夫を行っています。

留学生を活用した外国語・異文化理解教育の推進

比較文化学類では、平成20、21年度に学内の「教育プロジェクト支援経費」の援助を受け、留学生を活用した標記教育の推進に努めています。

国際化推進のカリキュラムと海外での授業の実施

日本語・日本文化学類では、ロシア、スロベニア、フランス、台湾、マレーシア等で教育実習などを行い、留学生との合同授業も実施しています。

今後の重点目標の一つとして、本学群における学位授与、教育課程編成・実施、および入学受け入れの方針を、平成24年度末までに策定・公表することを目指しています。

社会科学を中心に応用分野を含めた 総合的な教育を行うー社会・国際学群ー

社会学類と国際総合学類が連携と競争をしながら、社会科学（社会学、法学、政治学、経済学）を中心に、情報工学や環境工学等の応用分野も対象にして、専門性を明確にしつつ、総合的な知識と方法論を教育しています。

グローバル30「社会国際学教育プログラム」

学群教育の国際化をはかることを目標に、英語だけで学位「国際社会科学」を取得できるプログラムを開設し、留学生の積極的な受け入れを推進しています。

国際性の日常化:衛星を用いたアジアeラーニング

タイ国のアジア工科大学やチュロンコン大学、マレーシア国のマルチメディア大学との間で、超高速インターネット衛星「きずな」を用いた遠隔授業を実施し、日常的な国際交流を進めています。

社会に開かれた教育活動:模擬法廷授業、OBによる中国連携講座、筑波山ルネッサンス授業

裁判員制度の施行を踏まえ、模擬法廷教室を構築し、体験型模擬法廷授業を行っています。また、存在感を増す中国を対象にして、学群OBによる中国連携講座を開講しています。さらに、活力ある地域社会の創・再生を目的とした実践的地域づくり活動の担い手を育成する、「筑波山ルネッサンス」を開講しています。

ビジネス科学研究科とは

ビジネス科学研究科は、東京教育大学の跡地の東京キャンパスで、教育、研究を行っている夜間社会人大学院です。東京キャンパス夜間社会人大学院の構成は、表1の通りです。

ビジネス科学研究科には、法律系と経営系の専攻があり、それぞれに研究志向の大学院と専門職大学院があります。博士後期課程の企業科学専攻もあり、授与している博士学位は、法学、経営学、システムズ・マネジメントです。大学研究センターもビジネス科学研究科に属しています。

ほとんどの学生が昼間に仕事をし、夜間に大学院で学んでいます。働きながら大学院で学ぼうという就学の動機は、「理論を体系的に理解したい」「最新鋭の実践力を得たい」「キャリアアップに役立てたい」など、さまざまです。

	ビジネス科学研究科		人間総合科学研究科	
修士	経営システム科学専攻 (14)	企業法学専攻 (14)	生涯発達専攻 (13) カウンセリングコース (6) リハビリテーションコース (7)	スポーツ健康システム・マネジメント専攻 (8)
博士	企業科学専攻 システムズマネジメントコース 企業法学専攻		生涯発達科学専攻	
専門職	国際経営プロフェッショナル専攻 (12)	法曹専攻 (15)		
センター	大学研究センター (4)			
支援室	ビジネス科学等支援室 (24)			
学生数	493		181	

表1. 東京キャンパス夜間社会人大学院の構成 ()内は教職員数
[平成21年10月1日現在]

魅力的な夜間社会人大学院を目指して

研究科にとっての最重要事項は夜間社会人大学院として質の高い教育の提供であり、勉学時間に制約がある中、効率的に学生が学べるようにするため、さまざまな努力をしています。その成果として表2に示すとおり、高い志願者数倍率と、ほぼ100%の定員充足率を確保しています。特に博士後期課程では、近年は定員のほぼ3倍の志願者数で、これは社会人大学院の重要性の現れであり、これらの期待に応えることが、ビジネス科学研究科の使命と認識しています。

また、法律、経営という分野の性質上、大規模な実験装置が必要ではなく、個人での研究推進を主体とし、夜間大学院教育や社会のニーズをかんがみ、積極的に研究活動をしています。このような背景から、ビジネス科学研究科の特長は、魅力的な社会人教育の実現に向けた種々の取り組みにあります。

		H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22
経営システム科学専攻 (30)	前期	164 36	142 34	114 30	156 32	128 28	145 32	119
	後期	68 32	63 31	53 30	48 32	51 32	66 29	56
企業法学専攻 (30)	前期	52 25	61 25	77 24	70 26	77 27	71 22	70
	後期	39 33	30 26	30 26	57 32	68 36	71 31	80
国際経営プロフェッショナル専攻 (30)	前期	496 40	470 40	511 43	472 40	278 40	216	
	後期							

表2. 専攻別受験者数、入学者数
上段：志願者数、下段：入学者数
()内は定員、*1：平成22年度からは36人

特徴ある取り組み

ステージ制教育評価の導入

研究を進める学生は、常に「自分はどこまで進んでいるのだろう?」という不安感と向き合っています。特に、ビジネス科学研究科の学生は、時間に制約があるために、“火

事場の追い込み”的な論文作成が難しいため、その不安感は一層大きなものです。この不安感を解消するために、研究がどこまで進んだかが分かる、ステージ制を導入しています。例えば、博士後期課程の企業科学専攻システムズ・マネジメントコースでは、「研究計画」「サーベイ」「中間発表」「ドラフト」「予備審査」「審査」というマイルストーンを設け、どこまで進んだか、学生自身が分かる仕組みを導入しています。法律系の専攻でも、このようなステージ制を、導入しています。

集团的指導の充実

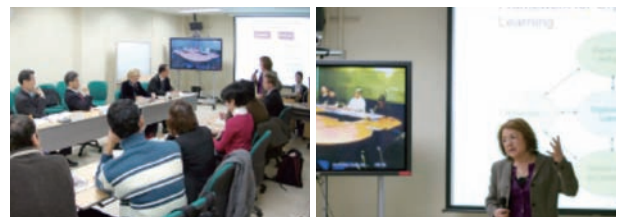
社会人大学院生の問題意識を尊重し、それぞれの問題意識に基づく教育や研究支援を実施しています。このために、複数の指導教員がチームを構成し、異なる視点から、教育研究を支援しています。また、社会経験が豊富な学生なので、中間発表会などで学生間で討論できるようにしています。

履修証明プログラム

大学研究センターが、大学のマネジメント人材の育成を狙いとした、筑波大学初の履修証明プログラムを設立しました。社会に密接しているというビジネス科学研究科の趣旨と、大学研究センターの研究領域が、うまく結びついた取り組みです。

インターネット共同講義開催

社会人大学院生は、時間的・空間的制約が多いため、ICTの活用が不可欠で、この推進を積極的に行っています。例えば、国際経営プロフェッショナル専攻では、フランスのグルノーブル大学との共同講義を実践しています。これはICTを活用して、グルノーブル大学と筑波大学が仮想的に一つの教室になり、相互討論をして知見を深めるといものです(写真)。



遠隔共同講義の様子

認証評価

ビジネス科学研究科には、2つの専門職大学院があり、専門職大学院に義務付けられている第三者認証評価を2008年、2009年に受審しました。現場では十分と思われる取り組みをしても、外部から見ると不十分な可能性もあります。そのような意味で、教育研究内容を第三者から評価してもらうのは、教育研究の質向上に多大な貢献があります。

生命環境科学研究科のさらなる発展に向けて

本研究科は、平成12年に(旧)生物科学研究科、農学研究科、地球科学研究科が統合されて、5年一貫制博士課程として誕生し、平成17年度と19年度の2回の改組を経て、現在の教育研究組織になりました。特に、平成19年度に(旧)修士課程環境科学研究科が本研究科と統合して、名実ともに教育研究内容が充実されました。本研究科の使命は、その名前の通り、21世紀の人類の生存にとって、根本的に重要な生命と環境に関する、特色ある教育研究活動の推進です。

最近の教育・研究・社会貢献の実績

グローバル30プログラム(G30)、国際生物学オリンピック、日中大学院生フォーラムの諸事業をはじめとして、本学の先頭を切って教育の国際化を、推進しています。平成21年度末からは、組織的な若手研究者等海外派遣プログラムも始まりました。また、JICAとの連携によるSRD教育、つくば市・研究機関との連携によるつくば3E(Environment、Energy、Enomony)フォーラム、茨城県との連携による女性リーダー育成講座、市民との日常的Café開催など、地域・社会貢献にも力を入れています。このような活動とともに、研究科の外部資金獲得総額は、毎年1億円程増加し、平成20年度には約13億7000万円にもなりました。平成17年度以降、日本学術振興会賞3人、文部科学大臣表彰科学技術賞8人など、数多くの受賞も特筆されます。さらに、関連5センターの活動も非常に活発で、平成22年度からは、そのうち2センターが全国共同利用・共同研究拠点になります。



第1回日中大学院生フォーラム

今後の取り組み

さらなる教育研究の国際化を推進するとともに、国内外の他組織(研究科・大学研究機関など)との連携による研究拠点形成、質の高い教育・研究・社会貢献活動などを発展させるために、研究科の組織運営の在り方を改善し、教職員の就業環境の快適化を目指した、新たな工夫をして行きます。

生命環境学群の特色とG30プログラム

本学群では、国内外で活躍する未来創造型の人材育成を学群共通の基本理念に掲げ、各学類は①専門性と学際性の調和②自ら学ぶ能力の育成③国際的視野・キャリア意識^{かんよう}の涵養の3要素を重視した教育課程の編成に努力しています。新たにスタートする学群G30プログラムでは、本学の先陣を切って世界に通用する「筑波スタンダード」を目指します。

学生の意欲を伸ばす教育

生物学類では、卓越した学生の育成を目的に、BSリーグ(平成20年度～、JST「未来の科学者養成講座」)、国際生物学オリンピック(平成21年)、研究マインド応援プログラム(平成21年度～、文科省「理数学生応援プロジェクト」)を実施しています。また、成績評価基準ガイドラインの設定、全科目評点分布・学生授業評価の完全公開など、主体的学習を促す教育環境の整備に努めています。

海外協定校との単位互換とネットワーク構築

生物資源学類では、地域的かつ地球的視野をもって、わが国および世界の食料・環境問題の解決に貢献できる人材を育成するため、カセサート大学(タイ)を中心とするアジア圏での単位互換プログラム(平成17年度～)を、北米のユタ州立大学(平成22年度～)やフランスのボルドー大学(平成23年度～予定)に拡充し、言語や文化の違いを超えて、食料・環境問題を学ぶことができる教育のグローバル化・ネットワーク化に取り組んでいます。



平成21年度生物資源学類・カセサート大学の単位互換プログラム

人材養成目的に即した教育

地球学類では、環境、災害、教育、行政などの諸分野で即戦力となる人材の育成を目標に、地球情報(気象、地質、環境、産業、文化など)を解析する力、自然・人文諸現象を観察し分析する力、国際性を高める教育を重視し、「グローバルな地球学教育」と「野外科学教育拠点」を二本柱とする、本学独自の教育プログラムの構築に取り組んでいます。

学群教育における専門性と総合性を強化

平成19年度の学群改組により、従来の第二学群人間学類は、人間学群として新たなスタートを切りました。三つの主専攻を学類として各々の専門教育を一層充実させるとともに、学群コアカリキュラムなど学類を越えた教育の展開と充実を図ることにより、学生が人間について総合的に学ぶことのできる教育システムを構成しています。海外での実習科目など国際的に活躍する人材の育成や、社会貢献型専門教育の構築にも注力しており、また、クラス連絡会やランチタイムミーティングを通して学生との対話を教育改善に生かす取り組みも進めています。本年3月には、人間学類35周年式典事業を実施しました。



Ningen35ポスター

多様なニーズに応え得る大学院教育の展開

人間総合科学研究科の人間系の専攻と教育研究科は、社会や学生の多様なニーズに応え得るよう、平成20年度に専攻を改組再編しました。

人間総合科学研究科の教育学関係の専攻は、優れた教育学研究者の養成と国際教育協力ネットワークの充実への貢献を目標としています。博士課程修了者等の約7割が研究職へ就職しており、また、JICA筑波及び教育開発国際協力研究センターとの連携による、中南米集団研修等の取り組みを進めています。

心理学関係では、区分制への移行により高度職業人養成の機能を強化し、心理実践家によるオムニバス講義や実務的な心理学方法論など、特色ある教育を実施しています。後期課程では、優れた研究者の育成に向け、専攻長賞、上武学術奨励賞などによる研究奨励を行っています。

障害科学専攻では、区分制への改組を機に、前期課程の定員増とともに、推薦入試を開始しました。附属の特別支援学校と連携して臨床的な教育研究を行うとともに、全学の障害学生支援活動を推進しています。また、国内最大の障害別領域の教員を擁する特色を生かし、「障害科学学会」の設立や「障害科学の展開」(全6巻)の刊行なども進めてきました。

生涯発達専攻・生涯発達科学専攻では、東京キャンパスの立地を最大限に生かした社会人大学院を展開しています。志願倍率も高く、関係領域から大きな期待が寄せられています。総務省消防庁との共催事業「消防職員のための惨事ストレス研修」では、全国の消防本部から研修生を受け入れ、高い効果をあげています。

教育研究科では、二つの教員養成GPなど優れた取組実績を上げており、国立大学法人評価における教育に関す

る現況分析では極めて高い評価を得ました。二つのGPの成果を基盤として改革を進め、ピュアサイエンスの高い力量と現代の教育課題に対応する授業力・実践力を育成する特色あるカリキュラムを編成・実施しています。

学際系3専攻の今後の展望

ヒューマン・ケア科学専攻(3年制博士課程)は、人間安全保障の理念に基づいて、統合や共生の技術・制度の研究推進と人材育成のために、①ダブルメジャー教育推進②カウンセリング記録誌による教育の質的向上③専攻案内・教育研究報告の情報発信④寄附講座によるアジアの人間安全保障研究⑤高齢者ケア管理SPの教育システム構築を重点目標としています。

スポーツ医学専攻(3年制博士課程)は、第一期中期目標期間において科学技術政策担当大臣賞、秩父宮記念スポーツ医・科学奨励賞受賞をはじめ、着実に実績を挙げています。今後、睡眠医学との学際研究、国の健康大国戦略に対応した Smart Wellness Cityへの取り組み、健康支援学領域の新設など、研究・教育の進展を目指します。

感性認知脳科学専攻(博士前期課程・後期課程)は、21世紀COEや大学院GP等の外部資金を獲得し、感性やこころに関する教育研究を推進してきました。学生と教員が全員参加する専攻合宿プログラムなどを通して、芸術・心理・障害・医学を架け橋とする広い知識と技術を修得した企業人、研究者及び教員の育成をさらに展開します。

「体育・スポーツの知と技の伝承と創造の空間」の構築を目指して

体育系の重点目標には、①平成22年度からの概算要求採択事業の推進(次世代型体育・スポーツ指導者養成システムの開発事業:体育専門学群、たくましい心を育むスポーツ科学イノベーション-認知脳科学の導入-)体育科学専攻②教育課程の見直し(体育専門学群、体育学専攻、スポーツ健康システム・マネジメント専攻、コーチング学専攻)③筑波大学スポーツアソシエーション構想の推進(体育系全体)④教養教育機構と連携した新たな共通科目「体育」の目標設定⑤本学の体育・スポーツ施設の全国共同利用施設化の推進(体育センター)⑥大学院修了生を中心としたネットワークの確立と活用(スポーツ健康システム・マネジメント専攻)などがあります。

今後は、体育・スポーツ界において国内だけでなく、世界の拠点となるため、体育系(スポーツ医



体育総合実験棟

学を含む)が一丸となって、筑波の地に「体育・スポーツの知と技の伝承と創造の空間」を作り上げるべく鋭意努力していきます。

アトリソースの構築・活用を国際交流の場に展開し拡大

芸術系の教育の質の保証と達成すべき水準は、教育研究成果の公開としての展覧会形式などの作品展示や作品集などの刊行物によって常時検証され、学内外で評価の対象となっています。これらの事業はこれまでも活発に実施され、教育成果の公開にとどまらず、地域貢献等の視点からも高く評価されてきました。

芸術専門学群および関連する人間総合科学研究科の芸術系専攻は、これまでその成果として蓄積してきた物的資源(作品など)をさらに活用するアトリソースの構築としての事業を、芸術の部局間交流協定校を中心とする国際交流の場に展開し拡大していく計画を持っています。昨年度から本年度にかけての中国美术学院との学生作品交流展と関連するシンポジウム等の開催は、一定の成果を上げました。また、人的交流から学生作品のコンクール参加へ展開した本年度のシドニー大学との交流も、来年度は相互の教員作品の展示や、収蔵作品の交換展などへと継続されます。

これらの事業を企画立案し統括する組織として、芸術国際交流委員会を設置し、芸術に関連する国際交流事業のさらなる活性化を図る予定です。

運営の一体化・効率化と組織間調整機能の向上

医学系では、医学部門会議を組織して、学群と大学院の枠を超えた教育・研究活動を一括管理する体制がつくられています。人事、財務、施設・設備、広報、国際に関する委員会により、運営の一体化・効率化と専攻や学類などの組織間調整機能の向上が図られ、多くの先進的な取り組みを実現してきました。

先進的教育プログラムの推進と医学系大学院の改革

医学類においては、筑波方式と呼ばれるPBLテュートリアルを中心とした能動的学習プログラムが実施されており、医学教育企画評価室(PCME)がコアとなり教育の組織的運営が定着しています。看護学類においては、大学院と連携した専門看護師の育成や、社会人の再チャレンジ教育が行われています。医療科学類においては、臨床検査技師の養成とともに、医学類担当教員と一体となった教育体制の実現により、優れた科学研究に基づく研究志向の学生教育も実現しました。また、国際医療職養成のための英語コースを設置します。

大学院においては、人材養成の目的の明確化、シラバスによる学修目標と評価基準の体系化、学位審査基準の策定、FD活動の充実による学位プログラムの組織的運営が行われるとともに、数々の競争的資金を獲得して、国際社会で通用する学生の育成に取り組んできました。留学生と日本人学生が英語で共に学ぶ国際コースや、理学・農学分野の学生と共に切磋琢磨する未来生命科学コースが作られるとともに、たくましい学生を育成する武者修行型学修が行われています。



大学院生によるベトナムでの実験指導

質の高い研究推進のための戦略的施策

医学系大学院教員の責務の一つとして、「学術文化の発展的伝承に繋がる質の高い基礎研究の推進」が挙げられます。これを実現化するための施策として、①基盤的研究資金の効果的・戦略的な配分と競争的研究資金の獲得の増加②外部資金による若手研究者の積極的な雇用・育成③設備の有効利用の三点を主軸として、これらを組織的に展開しています。

基盤的研究資金の効果的・戦略的な配分としては、若手研究者や新任教授・教員の基盤研究を支援するために、研究プロジェクト等支援経費を戦略的に配分し、また、医学系専攻の戦略的経費をコアファシリティーの管理・運営、最先端機器の導入、技術支援者の雇用に充当しており、個人研究やグループ研究の推進を支援しています。競争的研究資金の獲得の増加を目指して、科研費申請・獲得キャンペーンやその他の大型競争的資金獲得戦略を組織的にに行い、その成果が目に見えて上がっています。

外部資金による若手研究者の積極的な雇用・育成については、平成19年度に科学技術振興調整費による人材システム改革・若手研究者育成プログラム「次代を担う若手大学人育成イニシアティブ」に採択され、現在、7人の若手研究者をテニュアトラック制医学系教員として採用し、若手大学人育成を推進しています。本プログラム終了後には、医学系専攻戦略的経費を運用して自走型テニュアトラック制度として継続させ、若手研究者の雇用拡大も合わせた若手大学人育成を目指しています。

設備の有効利用に関しては、医学系組織内にすべての研究者がアクセス自由なコアファシリティーを設置・運用しています。一部の最先端機器については、専門技術者をオペレーターとして配置し、個人研究、グループ研究の支援に努めています。

計算科学研究センター

近代科学は、人間社会に大きな変化と発展をもたらしました。科学の進歩とともにあらゆる技術や知識が発達し、私たちの生活の中では、便利な道具が生み出され、生活が豊かになりました。こうした科学の進化の中で、現在、新たな学術領域として広い分野で活用されているのが「計算科学」です。昨年、行政刷新のために行われた国家予算の事業仕分けで話題となった「次世代スーパーコンピュータ」。計算科学の重要性と、筑波大学計算科学研究センターが担う役割を紹介します。



計算科学研究センター



T2K-Tsukuba

■シミュレーションと分析によって解明する“第三の科学”

科学はこれまで、「理論」と「実験・観測」を追究することによって進歩してきました。一方で、実験が難しい現象や原理的なことは解明できているのに、紙と鉛筆で計算しきれない理論もあります。このように、人間が「道具を使って実験や観測することが困難な問題」をコンピュータ（計算機）によってアプローチしていく方法が「計算科学」です。

近年の科学は加速度的なスピードで大きく進歩しています。それは、スーパーコンピュータ（スパコン）と呼ばれる超高速計算機や超高速インターネット技術を活用し、大規模なシミュレーションと大量のデータを解析することで、これまでは実験や観測が難しく、「理論」として確立できなかったり、膨大な解析が必要な問題が解決されるようになったためです。

こうした科学の進歩は、例えば、「地球温暖化」など自然環境の変化を予想したり、膨大な遺伝子の解析などによって、医学・医療の発展に貢献したり、安全でエネルギー効率のいい自動車設計に役立ったりするなど、わたしたちに身近な生活の中で、大きく貢献しています。

現在、「計算科学」はあらゆる分野で用いられる手法となり、「理論」「実験・観測」と並ぶ、重要で最先端な研究手段となっており、今後の科学の解明や進歩にとって、重要な分野として期待されています。

■世界一のスパコンを開発した技術と知識の蓄積

本学は、計算科学について早くから研究と開発を進めてきました。

1980年代から並列計算機と呼ばれる計算機の研究を開

始し、いくつかの高速計算機を開発。素粒子物理学の研究のために高速計算機を開発することを目的に、1992年には計算物理学研究センターが設立されました。こうした中で1996年に開発された「CP-PACS」は、当時の世界最高速（計算速度＝614億回／秒）のスパコンとなり、日本の科学技術の進化に大きく貢献しました。もちろん、開発した高速計算機を活用することによって、素粒子研究、宇宙研究、物理生命研究などの分野で大きな成果をあげてきました。

その計算物理学研究センターを前身として、2004年、さらに大規模に発展させ設置されたのが、現在の計算科学研究センターです。これまで大きく分けて5分野だった研究部門は、2010年4月から新たに再編され、「素粒子物理」「宇宙・原子核物理」「量子物性」「生命科学」「地球環境科学」「高性能計算システム」「計算情報学」という7分野の研究を行います。

また、国内の大学では計算科学だけを独立させている教育研究機関が少なく、大学内にセンターが設置されていることによって、計算科学を専門的に学んだ人材を、社会に還元させていく一翼も担っています。



1996年に世界最速を達成した第6号機CP-PACS



超並列クラスターPACS-CS

スで、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスには様々な施設が、どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。



■筑波大学計算科学センターの果たすべき役割

「本センターの大きな特徴は、具体的な計算科学研究と高速計算機の開発が、同じ組織の中で進められているということです。高性能なハードウェアの開発だけでなく、具体的に研究する理論を組み立て、その理論を効率よく計算するためのアプリケーションソフトを作り、計算科学の研究を進める。そのすべてを一つの研究機関が行っている本センターは、世界的にもあまり例を見ない組織であると自負しています」。佐藤三久センター長は、計算科学を発展させていくために、本センターの研究には2つの点が重要だと言います。「一つは、大規模な計算資源を使いこなし、計算科学のフロンティアを開拓する研究。大規模な計算資源を使いこなす研究に積極的に取り組むことは、

特権であると同時に義務でもあります。もう一つは、計算科学と計算機科学、また、計算科学の諸分野間との連携を生かす研究です。本センターは、計算科学を新しい学術領域として『学際的な計算科学』を確立し、継続的に発展させていくために、広い視野に立った研究・教育の拠点を目指しています」。



佐藤 三久 センター長

2012年には次世代スパコンが完成します。本センターは、これまで、次世代スパコンを開発する国家プロジェクトに協力してきました。次世代スパコンの利用については、本センターは計算基礎科学分野の戦略拠点として期待されています。すでに、次々世代のスパコンの研究・開発も、本格的に始まろうとしています。

急速に進む科学進歩において、国内で本センターの果たす役割と期待は、ますます大きくなっています。



宇宙の歴史



PCI-E-gen2通信プラットフォームのFPGA試作ボード



計算知能



予報システムホームページ



磁性炭素ナノチューブでの電子スピン密度雲



シトクロームcタンパク質の立体構造とその内部に存在するヘム(図の中央付近)の電子状態

計算科学が重点的に期待される4つのシミュレーション

- ①基礎科学のフロンティアの開拓
- ②マクロな自然と人間社会の関わり
- ③原子・分子のミクロの法則(量子力学)に基づく物質と生命
- ④ものづくりの道具として

4月から再編された研究部門

素粒子物理研究部門	地球環境科学研究部門
宇宙・原子核物理研究部門	高性能計算システム研究部門
量子物性研究部門	計算情報学研究部門
生命科学研究部門	

「15歳からのスタート」 筑波大学附属坂戸高等学校



池袋駅から若葉駅まで、東武東上線急行列車で約40分、若葉駅から徒歩約8分。緑豊かな自然に囲まれたところに学校はあります。生徒数は12クラス(各学年4クラス)480人、教職員は50人です。

1946年に1町5カ村の組合立坂戸実務学校・坂戸実修女学校として創立され、その後、組合立坂戸高等学校、東京教育大学附属坂戸高等学校を経て、1978年、筑波大学附属坂戸高等学校に改称。1994年、全国初の総合学科として現在に至ります。

それでは、坂戸大輔君の学校生活をのぞいてみましょう。

キャリア教育が君を変える ー総合学科のパイオニア「筑坂」ー

大輔は15歳の高校1年生。今、懸命に取り組んでいることがある。それは時間割を作ること。総合学科高校の「筑坂」では、1年生のときに2、3年生で履修する科目と系列を選び自分だけの時間割を作る。科目を選択するには、どんな進路に進みたいかを考えなければなりません。1年生は「産業社会と人間」という科目を受け、働くことの意味や価値、自分がやりたいことやどんな職業に就きたいのかを、体験したり学びながら、自分のライフプランを考えるのです。

ぼくらのSPP ーサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトー

大輔は自転車競技部のF先輩に時間割のことを相談しました。先輩の答えは「とにかくいろんなことに挑戦しながら考えるんだ。オレはこの夏ICT合宿へ行ってくる」でした。「筑坂」では長期休業中にさまざまな学習の場が用意されています。工学システム・情報科学系列のF先輩は、筑波大学でUNIXについて教わるらしい。同じクラスのYさんのお姉さん(生活・人間科学系列2年)は、11月に女子栄養大学で化学の実験に参加させてもらおうと言っていました。兄弟姉妹や親子でこの学校に通って来る人が多いのも、

「筑坂」の特徴のひとつです。担任のK先生は「人文社会・コミュニケーション系列は秋休みに統計学講座を受けに行くのよ」と言っていました。文系なのに統計学?どうやらこれはSPPというプロジェクトが全系列で実施されているようです。科学技術振興機構(JST)が進めているプロジェクトです。大輔が選択を希望している生物資源・環境科学系列では、秩父の方へ聞き書き調査に行くと顧問のA先生が話していました。

世界の国からこんにちは ー国際教育ー

「筑坂」では、海外から多くの来訪者があり、また、生徒が積極的に海外へ行くなど、国際的なムードがあります。3年生の先輩は、卒業研究で中国へ土壌調査に行ったり、先生もインドネシアの高校生に、エネルギーや環境について教えるなどしています。昨年はタイから6人の女子高生が「筑坂」の授業を受けに来校、3週間ほどホームステイを楽しみました。多くの出会いがあり、さまざまな学びと挑戦の場がある「筑坂」に入学し、2年生になるのがますます楽しみな大輔です。

もそれぞれの分野で我が国の教育をリードしています。
坂戸高等学校を紹介します。



◆部活動で活躍する生徒たち

インターハイや国体に出場する自転車競技部、全国大会に出場するかるた部、関東大会5年連続出場の演劇部など、多彩な活躍をみせています。



自転車競技部



かるた部



演劇部

◆地域貢献

坂戸市内の福祉作業所が合同で主催する夏まつりや福祉まつり、クリスマス会をはじめ、JAと商工会議所主催の産業まつりなど地域のイベントには、本校で福祉を学ぶ生徒や演劇部員たちが介護ボランティアやダンス・パフォーマンスを披露するなど、地域の福祉活動に貢献しています。



作業所夏まつり



クリスマス会

第7回 体操部

世界も見据える パフォーマンス集団



「新しいことにチャレンジしたい」「体を動かすのが好き」という運動愛好者が集まり、自分の体と向き合って、運動そのものを楽しむことを目的に活動しているのが「体操部」(長谷川聖修顧問、本谷聡監督)。五輪種目の器械体操を中心に活動する「体操競技部」とは別の世界だ。

21年度の卒業生を送り出し、新入部員が入るまでの現在、部員は11人(男子4人、女子7人)。総合体育館3階の体操場で、平日午後6時から同8時、土曜日の午前9時から同11時半、練習に励む。



まずは運動の基礎・基本である徒手体操でウォーミングアップ。主に、組み体操や器具を用いた運動パフォーマンスの練習が中心で、競技のための練習時間は設けていない。

同部が使用する代表的な器具の一つが「Gボール」。塩化ビニール製の直径約1メートルの大きなボールだ。もとは1960年にスイスの理学療養士が神経系に障害を持つ子どもに、リハビリ用具として使用したのが始まり。徐々にフィットネスやスポーツ関係で普及し、現在は本学が発信したスポーツ競技「ちゃんGボール」としても確立している。「G」はボールの特性に関係する「Giant(巨大)」、「Gymnastics(体操)」、「Gravity(重力)」の3つの英単語の頭



文字に由来する。リハビリやトレーニング、健康向上など、用途や可能性は無限大だ。

Gボールに乗ってバランスを取ったり、座ったり弾んだり、並べたGボールの上を滑るように転がったり。不安定な動きをするボールを、部員たちは多彩な姿勢で自在に操る。「子どもからお年寄りまで、幅広い世代で楽しめます。カラフルで見た目も楽しい。誰でもすぐに楽しむことができます」と黒田ふゆ子部長(体育4年)は話す。

そしてもう一つ、同部が取り入れている器具がドイツ発祥のニュースポーツ「ラート」。直径約2メートルの鉄製の輪を並行に2つつなげた器具で、輪の内外で自らの体重や力加減でごろごろ転がしながら、直転や斜転などの回転の美しさや難度のある動きを行う。上下左右に回転するので、逆さまになるなど非日常の世界を体感、まるで宇



宙遊泳をしているかのような気分を味わえるという。

より高いレベルを求め、ラートやエアロビクスなどの競技に参加し、実績を残す部員もいる。ラートの全日本学生選手権5連覇や世界大会でメダル獲得の好成績を残すなど、国内外でラート技術をリードする。

同部は、ラートで空間を生かしたダイナミックなパフォーマンスも展開。音楽に合わせ、美しく優雅な動きを披露する。その優雅さからは床上のフィギュアスケートとも言われるほどだ。

「体操は新しい挑戦、発見の毎日。自分たちが持つ身体能力で、どんな表現ができるのか、ワクワクする」と話す前田奈津希さん(同3年)。さらに、「見てくれる人がいるからこそこの体操パフォーマンス。自分の満足だけでなく、感動を与えられるような、魅せられる体操ができたらうれしい」と、見て楽しく、やって楽しい体操を持論にする。黒



田部長は「可能性を広げ、新しいことにチャレンジしていきたい」と意欲的だ。

また、同部はパフォーマンスを通し、体操の普及活動も担っている。恒例となっている「つくば体操フェスティバル」は、部員たちが1年かけて作り上げた体操演舞の晴れ舞台だ。同部員たちが指導を担当している地域の体操クラブなどが一堂に集まり、日ごろの練習成果を披露している。本年も、徒手、Gボール、ラートなどの各分野でテーマを決めて取り組み、フェスは成功裏を収めた。



体を動かす心地よさを感じながら、何度でも果敢に挑戦するスピリッツを持つ部員たち。習得した技術をいかに斬新に見せるか、挑戦は続く。洗練された質の高い技術に、部員たちの思いを乗せて。

このコーナーは、前身の師範学校から135年以上の歴史を有し、スポーツ分野において、オリンピックの金メダリストを始めとし、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会を紹介します。

主な競技成績及び今後の試合日程を紹介しますので、是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

【つくばスポーツ ONLINE】ホームページ <http://club.taiiku.tsukuba.ac.jp/>

【筑波大学体育会】ホームページ <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

柔道部 [日程]

- 第25回皇后杯全日本女子柔道選手権大会 4/18 横浜文化体育館
- 全日本柔道選手権大会 4/29 日本武道館
- 第59回全日本学生柔道優勝大会 6/26～6/27 日本武道館
- 第19回全日本学生女子柔道優勝大会 6/26～6/27 日本武道館

剣道部 [日程]

- 第56回関東学生剣道選手権大会 5/9 日本武道館
- 第42回関東学生女子剣道選手権大会 5/15 東京武道館

硬式野球部 [日程]

- 首都大学春季リーグ戦 4/10～5/23 平塚球場他

蹴球部 [日程]

- 第84回関東大学サッカーリーグ戦1部(前期) 4/10～6/20 西が丘サッカー場他

バレーボール部 [日程]

- 2010年度春季関東大学リーグ2部
【男子】4/10～5/16 駒沢大学玉川キャンパス体育館他
- 2010年度春季関東大学リーグ1部
【女子】4/10～5/16 青山学院大学記念館他

ハンドボール部 [日程]

- 2010年度関東学生ハンドボール連盟春季リーグ1部
【男子】4/10～5/16 国士舘大学多摩キャンパス体育館他
- 【女子】4/10～5/16 国士舘大学多摩キャンパス体育館他

テニス部 [日程]

- 第1回国際テニストーナメント大会 4/3～4/11 筑波大学

ライフセービング部 [日程]

- 第23回全日本ライフセービング・プール競技選手権大会 5/15～5/16 横浜国際プール
- 第23回全日本ライフセービング種目別選手権大会 6/5～6/6 静岡県(下田白浜大浜)

第7回 ときめき太鼓塾

撥さばき鮮やかに 伝統と未来を伝える



鉢巻きに法被姿、躍動感あふれる演奏で聴衆を魅了する和太鼓集団「ときめき太鼓塾」(佐久間泰一顧問)。2002年に創部、芸術系サークル連合会に籍を置く。現在、部員11人が週2回(月・水曜)第一エリア101講義室での練習で腕を磨いている。

活動は、春と秋に行われる天上大風や雙峰祭など本学のイベント出演のほか、地域のまつりや福祉施設での慰問演奏がメインだ。口コミで広がり、出演依頼を受けることもしばしば。学内だけでなく、同部の演奏を心待ちにしているファンを持つ人気サークルだ。部員たちは年間約20カ所の舞台を踏み、日ごろの練習の成果を発揮しながら演奏活動を通じ、聴衆との触れ合いを楽しみにしている。



メンバーのほとんどが、大学から太鼓を始めた初心者。基本姿勢や奏法の指導は、先輩から後輩へと伝えられる。楽譜化されていない伝承・伝統曲などは、他団体の演奏DVDやCDを何度もチェックしながら、音を声に出したり、体でリズムを覚える。

創部当時は部員数や太鼓の数も少なく、バケツにビニールシートを張って練習した。現在では、二尺太鼓、桶太鼓、締太鼓など数種の太鼓を使い分けた演奏のほか、篠笛や横笛、お囃子などで使われる鳴り物と言われるパーランク(太鼓)やチャップパ(手拍子)を取り入れ、バリエーション豊かな演奏もプログラムできるまでになった。

部長の高野弥生さん(比較3年)は「和太鼓の先入観にとらわれず、柔軟性を持ったサークルです。誰にでも楽しんでもらえるような演奏、パフォーマンスをしたい」と^{ばち}撥に力を込める。

昨夏、本学をメイン会場に行われた国際生物学オリンピックでは、交流イベント「筑波ナイト」で日本の夏祭りをテーマに各国選手らを前に、迫力満点



の大演舞を披露し、多くの聴衆の心を引き付けた。副代表の城田武明さん(人文3年)は「外国人選手たちのノリが良く、かけ声や合いの手を入れたり、踊りだす人もいて、とても楽しく気持ちいい演奏ができました。演奏に自然に力が入った」と振り返る。予想以上の反響が、活動への励みにもなった。

伝統の中にも新しさを加え、独自の演奏で魅了する。従来の和太鼓のイメージを打ち破るような現代の曲も取り入れ、ダイナミックな動きを交えた演奏も披露している。世界的にも活躍するプロの和太鼓集団の演奏からヒントを得て、同部の人数や会場の条件に合わせてパフォーマンスを構成する。高野部長は「現在の11人は決して多い人数ではないけれど、魅力あるステージを見せ、見ている人たちと感動を分かち合えたらうれしい」と抱負を語る。

演奏には、かなりの運動量を要する。「和太鼓を叩くのは全身運動。運動不足やストレス解消にもなります。良い

姿勢だと、音の響きも良いです。叩いた瞬間、その振動が体を突き抜けていく感じ」と城田さん。公演前には、撥を握った手が開けなくなるほど、練習に打ち込むという。それでも「もっと努力して良い音を出し、見ている人たちの心に響く演奏をしたい」と意欲を見せる。

次の公演は本学の新歓祭。メンバーと聴衆たちの呼吸がひとつになった時、魂の音がひとときわときめく。



2008 学園祭



2009 春の芸術祭

このコーナーでは、課外活動として、演奏会や展覧会、各種発表会、またボランティア活動などで、その腕前を披露している、文化系・芸術系サークルの催しを紹介します。

【筑波大学芸術系サークル連合会】ホームページ <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>

【筑波大学文化系サークル連合会】ホームページ <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>

新入生歓迎祭 4/7～5/31

各課外団体が様々なパフォーマンスで新歓アピール

- 文化系サークル連合会
- 芸術系サークル連合会

[場所] 学内

第18回天上大風 4/24

伝統的芸術系課外団体の発表会

今年のテーマは【薫風満帆(くんぷうまんぱん)】

- 津軽三味線倶楽部無絃塾
- 鹿島神流武道部
- 邦楽部
- 筑波能・狂言研究会
- ときめき太鼓塾
- 歌留多部

[開門] 午後0:15～(雨天時は4/25) [場所] 開学記念館

第26回つくば芸術祭 5/3～5

地域の方々との交流を目的とした芸術・文化系サークルが主催の一大イベント

今年のテーマは【こころ、かよう、つくば】

[場所] つくばセンター周辺

第36回やどかり祭 5/28～29

つくば市内に宿を借りる学生が中心となったイベント。模擬店や演奏、ゆかたコンテストなど盛りだくさんの内容

[場所] 平砂宿舍周辺

管弦楽団 5/15

第67回定期演奏会 指揮:海老原光

[場所] ノバホール

[時間] 午後2時開演

[料金] S席¥1,200、A席¥1,000

吹奏楽団 6/12

第63回定期演奏会

[場所] ノバホール

[時間] 午後4時開演

[料金] 前売券¥400、当日券¥500
(高校生以下無料)

平成21年度卒業式・学位記授与式

平成21年度の学群・理療科教員養成施設の卒業式が3月25日午前10時から、大学院学位記授与式が同午後1時20分から、それぞれ大学会館講堂で行われました。

卒業生数は、学群2,375人、理療科教員養成施設21人、大学院学位記授与者数は、博士課程350人（論文博士37人を含む）、修士課程103人、博士前期課程1,476人、博士課程修士18人、専門職学位課程35人でした。



山田信博学長から学位記を授与される学生



開学以来、最高齢（86歳）で博士号を取得した幡谷祐一さん（左）



管弦楽団および混声合唱団による送別の歌

学生表彰

卒業式、学位記授与式が行われた3月25日、学長応接室で午後4時半から、修学・研究活動や課外活動において優秀な成果・成績を修めた者を対象とする学生表彰が行われ、山田信博学長から学群学生4人（内1人欠席）、大学院学生4人に、賞状と記念品が贈られました。



表彰後に記念撮影をする学生たち

【表彰者】

氏 名	所属・学年
古橋 貞之	第三学群 情報学類4年
片岡 義裕	医学専門学群 医学類6年
熊谷 紗希	体育専門学群1年
筏井 リサ	体育専門学群3年
長谷川 浩司	システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 前期2年
深澤 智典	生命環境科学研究科 持続環境学専攻 後期3年
汐崎 七海	生命環境科学研究科 構造生物科学専攻 後期3年
小野 卓志	人間総合科学研究科 体育学専攻 前期1年



グランドスラム国際柔道大会（東京、パリ）で優勝の小野卓志選手

筑波大学(東京教育大学)大塚地区E館・G館に卒業生等100人がお別れ

東京教育大学当時も含め筑波大学のキャンパスとして使用してきた東京都文京区大塚地区にあるE館・G館を全面改築することに伴い2月28日、同所で「思い出会」が開催され、卒業生等を含めた約100人が集まり、親しんできた校舎との別れを惜しましました。

当日は、E館・G館の自由見学もあり、卒業生らは当時を思い出しながら館内を見学。「思い出会」では、山田信博学長があいさつ、北原保雄元学長が在学・在職当時の思い出の記念講演を行いました。



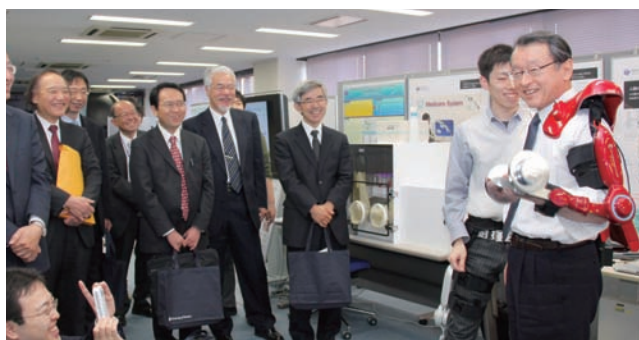
思い出の校舎の前で記念撮影

来訪者

■中川正春文部科学副大臣が本学を視察

中川正春文部科学副大臣が1月15日、本学を訪問されました。

中川副大臣は、山田信博学長から本学の概要や主な取り組みなどについて説明を受けた後、計算科学研究センターの超並列クラスタ計算機PACS-CSを見学、その後、山海嘉之教授(システム情報工学研究科)が開発したロボットスーツHALを装着して、ダンベルを持ち上げるなど性能を体感され、さらに渡邊信教授(生命環境科学研究科)から、高いオイル生産力を有する藻類ボトリオコッカスの説明を受けられました。



〈海外〉

3月2日(火) 学長表敬・調印



来訪者：アルジェリア民主人民共和国 ホウアリ・ブーメディエン工科大学学長一行
目的：学長表敬及び国際交流協定の締結(特に生命環境科学、都市工学、情報工学)

3月2日(火) 学長表敬・調印



来訪者：モロッコ王国 カディ・アヤド大学学長一行
目的：学長表敬及び国際交流協定の締結(特に生命環境科学、人文社会科学、情報工学)

3月3日(水) 学長表敬



来訪者：メキシコ合衆国 メキシコ農水大臣一行
目的：遺伝資源研究等に関する協定締結に向けた意見交換

受賞

■ 山海嘉之教授と渡邊信教授が学長表彰

文部科学省科学技術政策研究所の「科学技術への顕著な貢献(ナイスステップな研究者)」に選定された山海嘉之教授(2007年度、システム情報工学研究科知能機能システム専攻)と、渡邊信教授(2009年度、生命環境科学研究科生命共存科学専攻)に対し2月28日、筑波大学の研究者の優れた業績が社会的に広く認められ、本学の名誉を高めることに貢献したとして、学内表彰を行い、山田信博学長から記念の楯が贈られました。



写真左から 山海嘉之教授、渡邊信教授



BEST FACULTY MEMBER 2009

平成21年度大学教員業績評価により、極めて優れた活動を行ったと認められた本学教員への学長表彰が3月9日、大学会館ホールで行われました。



表彰式の様子



表彰式であいさつする山田信博学長

受賞領域	受賞者(所属)
「研究」「社会貢献・学内運営」	辻中豊 教授 (人文社会科学研究科 国際日本研究専攻)
「社会貢献・学内運営」	白田佳子 教授 (ビジネス科学研究科 国際経営プロフェッショナル専攻)
「研究」	弥永真生 教授 (ビジネス科学研究科 企業法学専攻)
「研究」	青木慎也 教授 (数理物質科学研究科 物理学専攻)
「研究」	山海嘉之 教授 (システム情報工学研究科 知能機能システム専攻)
「社会貢献・学内運営」「教育」	北脇信彦 教授 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻)
「研究」	柳澤純 教授 (生命環境科学研究科 生物機能科学専攻)
「社会貢献・学内運営」	沼田治 教授 (生命環境科学研究科 構造生物科学専攻)
「社会貢献・学内運営」	大高泉 教授 (人間総合科学研究科 学校教育学専攻)
「センター」	杉江征 准教授 (人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻)
「研究」	田中喜代次 教授 (人間総合科学研究科 スポーツ医学専攻)
「社会貢献・学内運営」	平山素子 准教授 (人間総合科学研究科 体育学専攻)
「研究」	玉川信一 教授 (人間総合科学研究科 芸術専攻)
「診療」	青沼和隆 教授 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻)
「社会貢献・学内運営」	本田克也 教授 (人間総合科学研究科 生命システム医学専攻)
「教育」	小田竜也 講師 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻)
「研究」	田中和世 教授 (図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻)
「教育」	大庭一郎 講師 (図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻)

●主な受賞等一覧

受賞名	受賞者（所属・学年）	指導・研究室
社団法人日本鉄道車両機械技術協会誌優秀賞	遠藤靖典 准教授 (システム情報工学研究科 リスク工学専攻)	_____
2009年度(第24回)日本放線菌学会賞	小林達彦 教授 (生命環境科学研究科 生物機能科学専攻)	_____
科学技術政策研究所 「科学技術への顕著な貢献2009(ナイスステップな研究者)」	渡邊信 教授 (生命環境科学研究科 生命共存科学専攻)	_____
2010 the Distinguished Paper Award	住田潮 教授 (システム情報工学研究科 社会システム・マネジメント専攻)	_____
第6回情報セキュリティ文化賞	岡本栄司 教授 (システム情報工学研究科 リスク工学専攻)	_____
日本オペレーションズ・リサーチ学会 リコメンテーションコンテスト2009 ビジネスモデル部門優秀賞	住田潮教授研究室「つくばCRM's」 (システム情報工学研究科 社会システム・マネジメント専攻)	住田潮 教授 (システム情報工学研究科 社会システム・マネジメント専攻)
つくば中央警察署から感謝状	土子昇 専門職員 (学生部学生生活課)	_____
平成21年度日本電熱学会優秀プレゼンテーション賞	松元佑樹 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	阿部豊 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
第27回宇宙技術および科学の国際シンポジウム JAXA President Award	長谷川浩司 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	阿部豊 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻) 金子暁子 講師 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
第17回原子力国際会議 Student Competition Session Best Poster Award	内山雄太 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	阿部豊 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻) 金子暁子 講師 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
Fourth International Topical Team Workshop on Two-Phase Systems for Ground and Space Applications (ITT'09) Best Poster prize	長谷川浩司 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	阿部豊 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻) 金子暁子 講師 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
日本混相流学会年会講演会2009学生優秀講演賞	前川知之 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年) 河上雅則 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程1年) 浅井英明 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程1年)	阿部豊 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻) 金子暁子 講師 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
日本マイクログラフィティ応用学会 第24回学術講演会毛利賞(最優秀ポスター賞)	長谷川浩司 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	阿部豊 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻) 金子暁子 講師 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
世界平和女性連合第7回WAWP女子留学生 日本語弁論大会 茨城県大会 最優秀賞および会場審査員賞	蔡碧月 (生命環境科学研究科 生命産業科学専攻 博士後期課程3年)	氷鉋場四郎 教授 (生命環境科学研究科 持続環境学専攻)
2009年度日本機械学会 動力エネルギーシステム部門優秀講演賞	堀井翔一 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	阿部豊 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻) 金子暁子 講師 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
2009年度日本機械学会若手優秀講演フェロー賞	内山雄太 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期課程2年)	阿部豊 教授 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻) 金子暁子 講師 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻)
日本生物工学会 Young Researcher's Award	佐々文洋 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士後期課程2年)	鈴木博章 教授 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻) 福田淳二 講師 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻)
Asia Pacific Biochemical Engineering Conference 2009 Best Student Poster Award	中野俊介 (生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期課程1年)	佐藤誠吾 教授 (生命環境科学研究科 生物機能科学専攻) 市川創作 准教授 (生命環境科学研究科 生物機能科学専攻)
Winter School on Chemistry and Physics of Materials Best Poster Award	川喜多磨美子 (数理物質科学研究科 物質・材料工学専攻 博士課程2年)	目義雄 教授 (数理物質科学研究科 物質・材料工学専攻)
第36回有機典型元素化学討論会ポスター賞	野澤竹志 (数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期課程1年)	関口章 教授 (数理物質科学研究科 化学専攻)
独立行政法人日本学生支援機構 優秀学生顕彰事業 文化・芸術分野奨励賞	越野結夏子 (芸術専門学群4年)	_____
独立行政法人日本学生支援機構 優秀学生顕彰事業 社会貢献分野奨励賞	山本泰弘 (第三学群国際総合学類4年)	_____
日本宇宙エレベータ協会第2回宇宙エレベーター アイデアコンテスト学術・社会貢献部門最優秀賞	大古喬之 (理工学群 応用理工学類2年 文化系サークル連合会宇宙工学研究会) 赤須雄太 (理工学群 応用理工学類2年 文化系サークル連合会宇宙工学研究会) 小田弦之介 (理工学群 応用理工学類1年 文化系サークル連合会宇宙工学研究会)	_____
2009 IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics (ROBIO2009) Finalist for Best Student Paper Award	桜井尊 (システム情報工学研究科 知能機能システム専攻 博士後期課程3年)	山海嘉之 教授 (システム情報工学研究科 知能機能システム専攻)
上月スポーツ・教育財団第7回スポーツ研究助成	松井崇 (人間総合科学研究科 体育科学専攻 博士後期課程1年)	征矢英昭 教授 (人間総合科学研究科 体育学専攻)
2010 the Distinguished Paper Award	金雅炯 (システム情報工学研究科 社会システム・マネジメント専攻 博士後期課程3年)	住田潮 教授 (システム情報工学研究科 社会システム・マネジメント専攻)
第3回高校生アートライター大賞 大賞 学校賞	三文字昌也 (附属駒場高等学校2年) 附属駒場高等学校	_____

※所属、職名、学年は平成21年度現在



谷本 歩実さん
コマツ 柔道家

アテネと北京、史上初の五輪2大会連続オール一本勝ちの金メダリスト、谷本歩実さん(体育専門学群、04年卒)に、柔道や五輪、ライバルへの思い、そしてこれからの目標などをお伺いしました。

プロフィール

1981年 愛知県生まれ
2004年 筑波大学体育専門学群卒業
" コマツ入社

オリンピック
2004年 アテネ 金メダル
2008年 北京 金メダル

世界選手権
2001年 ミュンヘン 銅メダル
2005年 カイロ 銀メダル
2007年 リオデジャネイロ 銅メダル

—柔道を始めたきっかけをお聞かせ下さい

幼いころから運動神経が良く、父に「将来はオリンピックに出るんだよ」と言われていました。体が柔らかかったので、本当は体操がしたかったのですが環境がなく、小学3年生のとき、バルセロナ五輪・金メダリストの吉田秀彦さんも通っていたという大石道場に、兄と通い始めたのがきっかけです。でも当時は、まだ他のスポーツもやってみたいと思っていましたが、今思えば、筑波大学でお世話になった中村良三先生、山口香先生、全日本の担当コーチである古賀稔彦先生ら多くの先生方との縁で、2大会連続で金メダルを取ることができたのだと思います。

—大学生活の思い出をお聞かせ下さい

学内をジャージ姿で歩き、柔道に明け暮れた日々でした。先輩や同級生は全国チャンピオンの人ばかりでしたが、わたしには実績もなく、1年生の時は投げ込み相手に受け身ばかり。しかし、意識の高い先輩方の中で、真剣に柔道に取り組めることが、うれしかったです。入学して2年目には、世界代表に選ばれました。のちの北京五輪の決勝で対戦したルーシー・デコス選手(仏)をライバルと意識し始めたのもそのころです。

世界ジュニア選手権の決勝でデコス選手に負け、彼女に勝ちたいという燃える思いが込み上げました。その目標ができてからは、いろいろな誘いは一切断ち、持てる時間すべてをトレーニングに注ぎました。

—そのかいあって、大学を卒業した2004年のアテネ五輪に出場し、金メダルに輝きました

オリンピック最終選考会は卒業した年の4月でした。オリンピックの出場枠のかかった前年の世界選手権、2回戦わずか7秒で負け、そのプレッシャーやストレスから、五輪選考間近の1～2月は、柔道着を着るだけで、体中に湿疹ができるほど苦悩の日々でした。そして、悩み抜いた末に、柔道の集大成をアテネでと気持ちを奮起し、最終選考会で優勝し、道を開くことができました。今思い出しても、卒業までの数カ月はとても辛いものでした。

—柔道へのこだわりをお聞かせ下さい

わたしの信念は「一本柔道」です。それは嘉納治五郎先生の教えにある人間教育の「精力善用・自他共栄」です。自分の力を良い方に使い、共に繁栄していく。正々堂々と柔道に取り組むこと。わたしはその精神をずっと教えられてきました。海外の選手にも嘉納先生の精神は伝わっており、講道館と筑波大学は柔道選手ならば誰もが足を運びます。現代の柔道はポイント先攻の勝利主義的考えが強

く、世界的に見ても一本を取るの
のできる選手は
少なくなってきた
ように思います。
だからこそ嘉納
先生の教えであ
る一本柔道に



は、教育理念に基づいた素晴らしい価値があるのです。五輪では自分が信念として貫いた結果が、オール一本勝ち。やってきたことは間違っていなかったと思っています。

—金メダリストとして北京五輪に挑む。アテネとは違った思いがあったと思います

五輪から次の五輪へ、気持ちを4年間維持するというのは相当きつく、アテネで引退するつもりでした。しかし、もう一度育てたいとおっしゃって下さる現在の松岡義之監督との出会いや、同じ階級にいる妹の励ましなどがあって、北京に挑むことを決意しました。アテネ五輪で優勝を決めた瞬間は、頭の中が真っ白になりました。このような感覚は初めてだったので、それを再度、北京で確認したかった。北京で優勝した瞬間のVTRを見ますが、やっぱりあの瞬間は真っ白で記憶にないですね。

—北京五輪ではライバルのデコス選手と対戦しましたが、その時の気持ちをお聞かせ下さい

デコス選手は北京五輪を最後に、階級を上げることが決まっていたので、最後の戦いが最高の舞台で叶ったわけです。わたしが内股一本でデコス選手を投げたとき、「投げながら笑っている」と多くの人に言われました。そんなつもりはありませんでしたが、彼女と組んだ瞬間、ワクワクして心底楽しかったんです。デコス選手とは生年月日も1日しか変わらず、運命を感じます。デコス選手はわたしの

持っている力を120%発揮させてくれる相手。この人には勝てないかもしれないという強さを感じます。だからこそ、彼女に勝ててうれしかったですね。



尊敬できるライバルに出会えたことを感謝しています。

—史上初のオール一本勝ちで五輪2連覇の栄冠に輝きました。環境や気持ちに変化はありましたか

「がんばって」と声をかけられることが多かったのですが、「ありがとう」と言われることが増えました。スポーツだけでなく、あと一歩が踏み出せないという人たちから「ありがとう」という手紙をたくさん頂きました。わたしの柔道を見て「がんばりたい気持ちになりました」と書いてあるんです。自分のやっていることが、誰かの心に響いていると気づかせてもらいました。

—今後、見据えている目標を教えてください

五輪のその日のために、4年間をつぎ込むわけですから、苦難の連続です。どれだけの覚悟と努力が必要かは、自分でよく分かっているのですが、今はロンドン(五輪)に対して覚悟が決まらない状況です。はっきり言えるのは、伝える人になりたいということ。昔、大石道場で吉田先輩に投げられた瞬間、「これが世界の内股なんだ」と世界を近くに感じました。五輪選手と触れ合うことで、世界を身近に感じられる。わたしがその距離を縮め、子どもたちに夢や希望を与えられたらいいと思っています。それが柔道への恩返しだと思うし、わたしの責任だと感じています。

—学生と筑波大学にメッセージをお願いします

五感を研ぎ澄ませることです。そして、良いものを見て聴いて、感情をより高めて下さい。筑波大は、先生はトップの方ばかりだし、高い目標を持つ一流の仲間たちもいる。その素晴らしい環境が当たり前の日常になっていると思いますが、いろんな刺激を受けながら自分を高めることで、夢にも近づけ、成長できる人間になれると思います。筑波はそれをどこよりも味わえる大学です。また、わたし自身が憧れ、卒業して誇りに思うように、イキイキ、キラキラした、夢のある大学であり続けて下さい。



写真提供: AFLO SPORT

リレー エッセイ

財務部契約課

佐藤 尚志さん



「幾億の^{あしおと}跽音が坂に積もり、吐く息が谷を埋める。わが箱根にこそ」(司馬遼太郎)

旧東海道箱根峠、木立の中の石畳に佇むとき、この碑文そのままに、往時の旅人の姿と息遣いまでが感じられます。

好きな登山や野球の体力維持も兼ねて、旧五街道「てくてく旅」を始めてから3年。道筋の名所旧跡や名物料理、四季の彩りを五感で感じながらの旅は、何とも楽しいもので、達成感とその後の仲間と酌み交わすお酒の旨いこと、これを至福と言わずして・・・と、まあこんなぐあいで、全1500キロ踏破が目前となりましたが、私の「街道をゆく」旅はところを変え、しばらく続きそうです。

次回は、病院総務部経営企画室の池田一郎さんです。
「病院繋がりです。月刊「経営戦略室だより」の編集を創刊以来続けているのには、頭が下がります」

総務部人事課

小島 幹正さん



筑西市から大学に車通勤して35年目の春を迎えようとしています。その間、車を何台乗り換えたか思い出してみたら、10台替えていました。車を利用している時間が多いので、エアロ・パーツなど付けて、ちょっとドレスシーな感じの車にしています。

また、中国と韓国に旅行して、興味が沸いて中国の武侠小说と韓国のドラマなどの海外テレビドラマをスカパー!で、をよく見ます。

息子が栃木県真岡市の「パティシエカワナ」という店で、スイーツを作っています。結構、地元では美味しいとの評判ようで・・・機会があったら寄ってみてください。

次回は、研究推進部研究基盤総合センターの安達理佳さんです。
「夫婦で働きながら、現在、子育てに頑張っている人で、昔、人事課で一緒に仕事をした仲間です」

附属桐が丘特別支援学校
副校長

吉沢 祥子さん



犬を伴いに一人暮らしの80過ぎた近所のおじいさんが足を骨折し、東北の姻族に引き取られて行った。無人家に一人(?)残された彼の相手をしてほぼ3カ月経つ。時々近くの人たちが差し入れに来る。いずれも高齢でヨタヨタと(失礼!)足元がおぼつかない。彼は壮年である。体も大きく力も強くとても一緒には歩けないので、散歩はもっぱら平日の深夜早朝、勤めの後先にわたしがする。生来の犬好きにより、少しも苦ではないが、おじいさんを待ちわびるのか、時々夜空に響く哀切な遠吠えが心に痛い。けなげに留守番をする彼は、この高齢化社会を何と思っているのだろうか?彼の命運も、おじいさんの状況も気になるのである。

次回は、附属聴覚特別支援学校副校長の今井二郎さんです。
「茗荷谷の会議などで時々お会いした時に、仕事上のコツなどを頂いています。その昔、教育大の学食などでどうもすれ違ったりしていたようです」

農林技術センター技術室

酒井 一雄さん



最近どっぷりはまっているのは温泉巡りだ。はじめは近場の喜連川・馬頭・矢板温泉から始まった。

温泉にゆっくり漬かり、年配のお父さん方と話がはずむ。いろんな情報が得られ、その繰り返しにより今では栃木のほとんどの温泉に漬かった。二年ほど前にホンダCB1300に乗り、福島県の会津高原から尾瀬沼方面へ何気に一人で走った。その帰りに、地元の人お勧めの木賊温泉に寄らせていただいた。この温泉は無色透明だ。肩まで漬かり匂いをそっと嗅いでみる。硫黄のほんのりとした良い香りだ。何度目の時だったか秘湯木賊で見たまぶしいばかりの星空は忘れられない。まだまだ温泉巡りは続きそうだ。

次回は、農林技術センター生命環境科学等支援室の山口和好さんです。
「愛車で山道やサーキットをドライブすることが趣味のようです」

生命環境科学等支援室

廣澤 恭子さん



外国語センターに勤務していた10年前、私は姉と坂東33カ所巡りをし、1年間かけて、仏像や寺社を訪ねた。またそれは、四季折々の風景を楽しみながら、歴史や文化とともにその地方の食べ物やお菓子を楽しむ旅にもなった。

千葉のあるお寺に行った時のこと。「朝は希望に起き、昼は努力に生き、夜は感謝に眠る」

という言葉に出合った。いい言葉だなあと思い、あれからいつも自分自身もそうでありたいと思いがらずと暮らしている。34枚(33カ所とお礼参りの善光寺)の見事な御朱印が押された掛け軸は、いつでもその時の感動を蘇らせてくれ、私の宝物となっている。

次回は、研究基盤総合センター工作部門の長田秀治さんです。
「寡黙なのですが、このセンターで全力投球している先生にお会いしてセンターの役目と素晴らしさを教わりました」

附属病院
看護部(903病棟)
看護師

森田 千映さん



2月、高齢出産をものともせず、入院してわずか3時間でわが子が誕生。超安産だった私に、スタッフの方は口々に「自転車のおかげね」と言いました。

世界最高峰の自転車レース「ツール・ド・フランス」観戦にはまって、02年からほぼ毎年フランスに渡っていた私ですが、友人の誘いもあり自転車に乗り始めたのは07年。風を切って走るのが気持ちいいのは言うに及ばず。軟弱な私を励まし支え、一緒に完走の喜びを分かち合える仲間ができたこと。これこそが一番の収穫です。その仲間の一人が生まれたばかりのわが子の父・・・(照)

次回は、附属病院薬剤部の神林泰行さんです。
「職場の安全を守る衛生管理者としてご一緒させて頂きました。院内の事なら何でも知っている頼れる大先輩です」

システム情報工学研究科
コンピュータサイエンス専攻
教授

山本 順人さん



地図を眺めるのが好きです。地図を読むのが好きです。当時、墨一色で画かれていた5万分の1の地図(地形図)を持って山や海岸に行っては、目の当たりにする景観と手元の地図を見比べている子供でした。地図が設計図であり、その図通りに目の前の景観が作られているかの様にさえ感じられていました。さて、三歳児の魂とやら、今は20万分の1の地図(地勢図)に、通った道を赤く塗ると言う楽しみがあります。県内の部分はかなり赤色勝ちになっており、それを眺めては、それぞれの場所で見えた景観を思い出しています。

次回は、附属図書館情報管理課の篠塚富士男さんです。
「本や雑誌に関してさまざまな事を教えてもらっています。特に自分の分野以外の書籍についてはとても有り難いです」

附属久里浜特別支援学校
副校長

倉見 昇一さん



ぬるめのお湯から漬かり沸かしながら入る風呂(入浴剤は必須)／モスグリーンSUV(15年も乗っています)／味噌汁の上澄み(離乳食かつ!)／ハイボールよりむしろマッコリ(最近ハマってます)／9番ライト(私の定位置)／最近アウトレットで買ったドライバー(安い価格でいいものを買いました)／秋口と春先に着られるハーフコート(これもアウトレット笑)／『愛・おぼえていますか』が流れるマクロス(Fever16R)／『私がオバさんになっても』(これは名曲)／液だれしない育毛剤(必需品)／藤木直人(今度生まれてくるときはこの顔で)／そして本校から見る野比海岸と子どもたちの笑顔。以上、私が気に入っているものでした。

次回は、附属学校教育局学校経理課長の落合祐二さんです。
「落合さんとは、もう20年以上同じ草野球チームに所属している仲です。私は近年、幽霊部員となりつつありますが、彼は今もレギュラーで頑張っています」



本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

【茗溪会とは】 社団法人茗溪会(西野虎之介理事長)は、筑波大学同窓会を母体とする公益法人で、1882年に設立しました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校(東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など)の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

茗溪・筑波グランドフェスティバルを「楽」しむ

第14回茗溪・筑波グランドフェスティバルが1月30日、筑波大学大会館で開かれました。今回は茗溪会と筑波大学共催で開催しました。同フェスは、筑波大学と前身諸学校の卒業生などが、世代を超えて交流し、親睦を深め、同窓の輪を広げることを



あいさつする新井達郎実行委員長

目的に開かれています。今回のテーマは「楽」。当日は、シンポジウムのほか、嘉納治五郎生誕150周年を記念した展示企画「嘉納治五郎のレガシー」展も同時開催されました。

シンポジウムでは、一倉宏氏の基調講演「ことば、世界と私に架ける

橋～独創性の入口、そして出口」の講演と、パネルディスカッションが行われました。人文学類1期生の一倉氏は、『きれいなおねえさんは、好きですか。』などで知られるコピーライター。「ことば」は“できそこないのドラえもんである”、“ことば”は、“相棒”であり、そこには、“可能性”と“限界性”があると話し、ことばと社会、創造性・独創性について話しをされました。

パネルディスカッションでは、井田仁康教授(人間総合科学研究科)が司会を務め、一倉氏が言葉の大切さ、原忠信講師(人間総合科学研究科)は飲料水のラベル図案などについて、また、小中大地さん(人間総合科学研究科2年)は妖精造形として作製しているゴブリンへの思いを語り、盛り上がりを見せました。

懇親会では、山田信博学長、西野虎之介茗溪会理事長をはじめ、多くの先生やOBが参加し、世代を超えた交流を楽しみました。



懇親会を楽しむ学生たち



写真左から 井田仁康氏、一倉宏氏、原忠信氏、小中大地氏



教職受験対策研修会の開催

茗溪会が毎年、教職受験を目指す筑波大学生のためにを行っている研修会が3月9日～11日までの3日間、筑波研修センターで開催されました。研修会は、①「我が国教育の今日的課題」「教員採用試験の分析と対応」と題する講義②論作文作成と論作文指導③面接と集団討論等の実演④合格体験発表などのプログラムで実施されました。講師には、教育行政OBの二人の先生をお招きし、また、高校長経験のOB3人、教職受験合格経験の学生5人が指導に当たりました。

受講した学生たちは、教育現場の経験豊かな先生方の話を真剣に聞き、先輩の合格体験を受け止め、個人面接を実際に行う中で、受験への覚悟ができていったようです。

論作文では、いまの学校の課題に向けて、自分の意見を手際よく迅速に、要点を押さえて書き出すことのポイントを教わり、受講生仲間とも相互の意見交流を行いました。



教職受験対策研修会で先輩から合格体験発表



本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

【紫峰会とは】 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とそこで父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。

UTcollection(ユーティーコレクション)とは

「UTcollection」は、筑波大学オリジナルブランドとして紫峰会が企画・販売を行っています。大学関係者に愛着をもってもらえるよう、University of Tsukubaの頭文字「UT」を冠し、海外の大学に比肩するブランドを目指して開発を行ってきました。

その由来は、1988年のソウル五輪にさかのぼります。五輪では、選手同士が自国や出身大学のグッズを交換をする慣習があります。当時の筑波大学は多くの五輪選手を輩出しており、関係者から大学グッズの要望がありました。そこで紫峰会が課外活動支援の一環として校章入りキーホルダーを制作し、選手に頒布したことから「筑波大学グッズ」の制作が始まりました。1998年、開学25周年事業として校章等が統一されたことを受けて「UTcollection」として本格的に開発を始めました。

開発は、大学VI制定に携わった芸術系の教員や、それまでグッズ制作に協力いただいた方々、現役学生、卒業生などに紫峰会が呼びかけ、制作に関わってもらっています。また、大学の授業と連携しての開発も行われるようになってきました。

近年、国内の大学グッズ制作が盛んになってきました。他の大学に負けないよう、大学や地元の魅力を生かしたオリジナリティーの高い商品を開発し、筑波大学のイメージアップや大学ファンを増やすことに、貢献していきたいと考えています。

親しみのある商品たち

開発当初、学生・教職員が必ずひとつは大学グッズを持っているようにしたい、という目標がありました。

学生向けとして開発したレポート用紙や履歴書用紙は今や必需品となり、各年間2,000冊以上が販売されています。ネックストラップは、大学のIDカードフォルダとして利用して頂き、ほとんどの大学職員が身につけています。筑波大学桐飴はつくば市特産品となっているブルーベリーの果実を練りこんだ細工飴で、断面に「五三の桐」を再現しています。オリジナリティーの高さとユニークさから、定番のお土産として好評を博しています。また、学年暦カレンダー、学年暦手帳は、4月始まりで3学期制の筑波大学のスケジュールが分かりやすく表示されており、新入生や保護者にとても喜ばれています。



特設科目「筑波大学を創る」との連携による商品開発

平成20年度に開設されたこの授業では、学生の手で大学グッズを企画するプロジェクトが立ち上がりました。授業の中で学生自身が、大学に必要なグッズとは何かを議論しあい、クラッチバッグ、トイレトペーパー、ネックストラップの3商品の企画が実現しました。

トイレトペーパー開発秘話

授業の中で、「学生自身が楽しめる面白グッズがほしい!」という意見から、オリジナルトイレトペーパーの企画が始まりました。大学の豆知識を刷り込んで、思わず見入ってしまうグッズを作ろうということで、「都市伝説」や「怪談」の談義で白熱した議論が繰り返されました。一方で、原料高・大量に製造しないと採算が合わないことや・在庫品の保管場所など、商品化には多くの課題があり、当初、実現は難しいと思われていました。しかし、担当学生自身が多くの業者にあたり、協力してくれる業者が見つかり、実際に製紙工場に赴き現場で交渉したことなどが、実現へ大きな足がかりとなりました。

最終的な企画検討の段階でも、1個300円のトイレトペーパーが本当に売れるのか?と紛糾しましたが、学生の熱意をくんで製造に踏み切ることになりました。販売を開始した2008年の学園祭では、予想していた倍以上の310個が売れ、その後も販売は好調で、今や人気商品のひとつとなっています。



本学関係の主な新聞記事掲載一覧(1月～3月)

	記 事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	本学の研究グループが脳機能が軽い運動で向上することを実証	征矢英昭教授(人間総合科学研究科)	日経(12.23)日経産業(12.24) 読売(夕)(12.24)茨城(12.30)朝日(1.4) ビジネスアイ(1.12)常陽(1.17)
2	文科省選定の「ナイスステップな研究者」に本学の渡邊信教授	渡邊信教授(生命環境科学研究科)	毎日(12.29)日刊工業(1.14)読売(2.7)
3	厚生労働省研究班(主任研究員:山田信博学長)が糖尿病患者調査 生活習慣改善で脳卒中の減少を証明 1/9に欧州糖尿病学会誌に発表へ	山田信博学長 曽根博仁教授(人間総合科学研究科)	時事(1.8)毎日(1.9)日経(1.9) 茨城(1.9)共同(1.9)
4	▽花まる先生:本学附属小学校 二瓶弘行教諭 伝えて知る言葉の力	二瓶弘行教諭(附属小学校)	朝日(1.9)
5	携帯見ながら歩いてませんか? 子連れや障害者が恐怖感	徳田克己教授(人間総合科学研究科)	産経(1.12)
6	中内靖准教授らの研究グループが 高齢者の薬の飲み間違いを防ぐシステムを開発	中内靖准教授(システム情報工学研究科)	日経(1.13)
7	本学が半導体先端テクノロジーズなどと共同で 次世代LSI向け絶縁膜材の信頼性低下要因を解明	山部紀久夫教授(数理物質科学研究科) 蓮沼隆講師(数理物質科学研究科)	日刊工業(1.15)
8	▽リポート2010:筑波大 留学生受け入れ強化 国際競争力向上へ	橘田正造(国際部長)	茨城(1.20)
9	▽時論・TX沿線のまちづくり:蓮見孝教授 魅力づくりの継続を	蓮見孝教授(人間総合科学研究科)	茨城(1.21)
10	嘉納治五郎の功績・理念を継承 生誕150年で本学が記念事業 銅像建立や国際シンポジウム、記念出版も	阿江通良教授(体育専門学群長)	常陽(1.22)
11	筑波山頂1904～2008年で気温0.7℃上昇	林陽生教授(生命環境科学研究科)	茨城(1.26)
12	非公開の「大明神の滝」 本学菅平高原実験センターが2/21日に見学ツアー実施	菅平高原実験センター	信濃毎日(1.26、2.22) 週刊上田(1.30)
13	本学学生宿舍地区に青色街頭を導入 防犯強化へ	鈴木久敏副学長	茨城(1.29)読売(1.31)常陽(2.4) 朝日(2.9)産経(2.11)
14	▽科学のまちから:筑波大遺伝子実験センター 「変異トマト」850種公開	遺伝子実験センター 江面浩センター長 有泉亨助教(生命環境科学研究科)	毎日(2.2)
15	本学の東京キャンパス大塚校舎建て替え 都内で入学増加ねらう		日経(2.3)
16	▽論点:附属視覚特別支援学校・宇野和博教諭 障害者・高齢者に情報格差 読書をバリアフリーに	宇野和博教諭(附属視覚特別支援学校)	読売(2.6)
17	本学が文京区と人材育成や芸術で協力協定締結		茨城(2.10)日経(2.20)日経産業(3.3)
18	本学の研究グループが「第三の酵素」発見 医学への応用期待	佐藤三久教授(計算科学研究センター長) 館野賢准教授(計算科学研究センター) 萩原陽介(数理物質科学研究科 博士後期課程3年)	毎日(2.11)常陽(2.11)読売(2.14) 日刊工業(2.23)朝日(3.5)
19	オットンガエルの指研究で本学が新説 “親指”実は骨でした		東京(2.15)
20	ニッポンの科学技術力 第2部揺れ動く現場④ カネより環境	山田信博学長 柳沢正史客員教授	日経(2.15)
21	本学主導でサービス業研修 学問の視点、経営に導入 「サービスカイゼン研修」2カ年コース顧客分析や提案作成	高木英明教授(システム情報工学研究科) 児玉創紀(システム情報工学研究科 博士前期課程1年)	茨城(2.17)
22	4月に本学で「第1回筑波大学国際テニストーナメント」開催 4大会の登竜門に	テニス研究室	茨城(2.17)朝日(3.3)
23	▽経済教室:弥永真生教授/国際会計基準と起業経営 潜在リスクの管理強化を	弥永真生教授(ビジネス科学研究科)	日経(2.19)
24	本学生が都市計画を提案 若い目線で土浦再生	大澤義明教授(システム情報工学研究科、学長補佐) 社会工学類都市計画専攻	日経(2.20)茨城(2.22)常陽(2.22) 東京(2.25)
25	柔道グランプリ 女子48㎏級で福見友子が優勝 男子60㎏級は平岡拓晃が準優勝	福見友子(人間総合科学研究科2年、了徳寺学園職員) 平岡拓晃(本学OB、了徳寺学園職員)	読売(2.22)茨城(2.22)
26	▽連携協定⑥:筑波大・日立グループ 障害物避け自立走行 物流支援ロボット開発	油田信一教授(産学リエゾン共同研究センター長) 坪内孝司教授(システム情報工学研究科)	日刊工業(2.23)
27	▽ドクターズキッチン④:治療初期 病院の取り組み加速 筑波大学附属病院、市民とも連携	川上康副院長 大原信医療情報部副部長	ビジネスアイ(2.26)
28	取手まちづくり大賞に本学・小場瀬研究室	小場瀬二研究室	朝日(3.3)読売(3.13)毎日(3.23)
29	▽放送をよむ:荻野祥三 静かで大人向き BS支持論	荻野祥三教授(本部付)	毎日(夕)(3.6)
30	走る!女医の卵 市民ランナー・水谷理紗さん 医療も自己ベスト更新も	水谷理紗(医学類6年)	読売(夕)(3.8)
31	本学附属病院、県内初の乳房再建外来を開設	附属病院(形成外科)	産経(3.9)
32	パラリンピック距離スキー 新田佳浩選手が金メダル	新田佳浩(本学OB、日立システム)	日経(夕)(3.19)朝日(3.20) 毎日(3.20)読売(3.20)産経(3.20) 東京(3.20)茨城(3.20)常陽(3.20)

イベントカレンダー (4月～6月)

4月

- 1日(木) 春季休業(～6)
未来の科学者養成講座 BSリーグ:
下田臨海実験センター
春の臨海実習(～3)
- 3日(土) 第1回筑波大学国際テニストーナメント(～11)
東京キャンパス大学院入学式・
新入生オリエンテーション
- 6日(火) 附属桐が丘特別支援学校入学式
- 7日(水) 入学式
- 8日(木) 新入生オリエンテーション(～9)
附属小学校入学式
附属中学校入学式
附属視覚特別支援学校入学式
- 9日(金) マリンバイオ共同推進機構(JAMBIO)
設立記念講演会(Shinya Inoue博士)
附属高校入学式
附属駒場中・高等学校入学式
附属坂戸高等学校入学式
附属聴覚特別支援学校入学式
- 12日(月) 第1学期授業開始
附属久里浜特別支援学校入学式
- 13日(火) 第51回科学技術週間【一般公開】(～18)
附属大塚特別支援学校入学式
第40回バイオeカフェ
- 17日(土) 科学技術週間:下田臨海実験センター
伊豆半島サイエンスネットワークの
ジョイントプロジェクト(～18)

5月

- 6日(木) 計算科学研究センターシンポジウム
「先端学際計算科学共同研究拠点」
- 7日(金) 計算科学研究センターシンポジウム
「計算科学による先導的知の創出」
- 11日(火) 第41回バイオeカフェ
- 22日(土) 春季スポーツ・デー(～23)
- 28日(金) 第36回やどかり祭(～29)
- 29日(土) 人間総合科学研究科生涯発達専攻、
生涯発達科学専攻オープンキャンパス



6月

- 5日(土) 人間総合科学研究科スポーツ・
健康システムマネジメント専攻
オープンキャンパス
- 12日(土) ビジネス科学研究科企業科学専攻
(システムズ・マネジメントコース)、
経営システム科学専攻オープンキャンパス
- 15日(火) 第42回バイオeカフェ
- 19日(土) ビジネス科学研究科企業科学専攻
(企業法コース)、
企業法学専攻オープンキャンパス
- 24日(木) 第1学期授業終了
- 25日(金) 第1学期期末試験(～7/1)



表紙

「総合研究棟B」

大学院の改組再編に伴い、従来の研究組織単位の枠を越えて、機能連携を図るため、数理工学科学研究科、システム情報工学研究科および全学共用スペースで構成された施設として、2004年に建設されました。



Tsukuba
Communications

vol.7

平成22年4月発行

編集・発行: 筑波大学広報室

住所: 〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

電話: 029-853-2063

E-mail: kohositu@un.tsukuba.ac.jp

URL: <http://www.tsukuba.ac.jp/>

IMAGINE THE FUTURE.

想像しよう、未来を。

地球の、環境の、社会の、未来を。

想像できなければ、創造はできない。

この星の未来は、失敗できない。

創造しよう、未来を。

共に生き、持続できる、開かれた未来を。

その扉をあける、挑戦者になろう。

開かれた未来へ。

筑波大学



University of Tsukuba

TSUKUBA
FUTURESHIP

筑波大学基金
はじまる!

<https://futureship.sec.tsukuba.ac.jp>